
みずうみのうみの船-ぷかぷか-

まいまい?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みずうみのうみの船 - ぷかぷか -

【コード】

N8695H

【作者名】

まいまい？

【あらすじ】

一つの湖、一つの島、一つの縦帆船しかない小さな箱庭のような世界のはなし。

主人公は、湖で唯一の船を持つ湖賊の少年船長。

船に乗り、数多の場所、人々と出会う運命にある彼は、知るかもしれない、うしなわれた幻想の海の謎を。

隠された美しい母なる海の境、海界ウナサカの行方を。

そんな閉ざされた小さな世界のちよつとした謎と不思議と、何の変哲もないまったり淡々とした平凡で適当な、おかしな日常、意味不明系な話。

1・大海原へ錨を上げよう！

「はじまるよ〜ん、はじまるよ〜ん、ぷかぷかへんよ〜ん」
しゃべる魚は、水槽の中を泳ぎ回る。それは、紫水晶のようなうるこを持つ幼い魚である。

「『おおうなばら』へとくりだすよ〜ん」
ここは、浮かぶ船。白い帆をたたえた、ゆらゆら揺れる帆船の中にある部屋。

魚は、水槽の前にいる飼い主の少年に、魚は頼み込む。

「ぼうけんねえ……」

魚の言葉を聞いて、少年は、そうつぶやいた。

その少年は、羽付きの青い帽子をして、眼帯をしている。いわゆる海賊のような格好である。目が悪いわけではないが、格好いいからという理由だけで、この海賊の格好をする時は、好んで眼帯をつけている。いわゆる形式美というやつである。

「ろまんろまん、わくわくよ〜ん、よ〜ん」

魚は飛び跳ねる。水が跳ねる。変わらず嬉々として、泳いでいる。

「それは無理」

少年はそんな魚を撫で、落ち着かせる。

「なんでだよ〜ん」

魚は疑問に思う。

少年は、ため息をついた。そして、この世界のある事実を、口から言葉に出して、魚に伝える。

「この世界には。海がない……」

少年は、両手をあげる。

これこそ、お・て・あ・げ・状態。

「よ〜ん!!!?」魚は驚く。

まさか、海がないとは思わなかったのだ。

「せいせい、みずうみ」

この船が浮かんでいる湖と、そこに浮かぶひとつの島以外は、この世界には存在しない。

この世界には、海はないので、この少年は海賊ではなく湖賊なのであった。

<ぶかぶか編・完>

魚の日記「おおつなばら」

おおつなばらは ひろいよーん

どこまでも すいへいせんだよーん

よーん

このせかいに うみがないけど みず「うみ」があるから

このみず「うみ」のおおつなばらを ぼーけんするよーん

すいへいせんがないけど それはがまんするよーん

> i 2 1 4 1 | 3 1 2 <

1・大海原へ錨を上げよう！（後書き）

しゃべる魚の語尾が、なぜ、「よーん」なのかというと、鯨の鳴き声が、自分には、なんだか、「よーん」と聞こえるからです。

しゃべる魚が鯨の仲間というわけではないのですが、水棲生物がしゃべるとしたら、語尾は「よーん」にしようと思ったという、

ただそれだけの理由です。

2・船の上の湖魚

船には、人懐っこい性格で、いろいろ知りたがる、好奇心が旺盛な湖魚がいる。

名前は、ヨンヨン。「よーん」が口癖だから。そういう安易な理由、そのまま名前だ。

ヨンヨンは、たまに、水槽から抜け出しては、船内を歩いている。エラ呼吸だけではなく、肺呼吸だってできるのだ。

乾燥にだって強い。炎天下や極端に乾燥した場所でなければ、1日くらいは、外にいても平気なのだ。

しかし、赤子の頭くらいの大きさのヨンヨンは、階段は降りられないが登れないし、ドアも開けられないので、行くことができる場所は限られている。

同じ階か、下の階に行くか、しかできない。

そして帰りは、大抵、誰かに、家である水槽まで連れて行ってもらう。

人語を理解するので、帆船に乗ってくるお客たちとも、時々、話をしている。

ヨンヨンは、船の人気者である。

ヨンヨンは、今日は、厨房を覗きに行っている。

厨房では、数人の料理人が各自自分の仕事をしていた。食事時間が近いのだ。

「ああ、しまった。魚を切らしてしまった」

食料の保存庫を見て、料理長が困っている。

船には、常に20人くらいの船員がいる。そして、お客として乗せる人が多い時には、すぐに食料はなくなってしまうのだ。

長い航海をするわけではないので、保存食もあまり準備していないのだ。

逆に、食料のストックがすぐなくなるので、いつも野菜や魚を仕入れることになり、新鮮なものが料理に使える利点もあるのだが……

ふと、ヨンヨンと料理長は目が合った。

「おいらは、食べてもおいしくないよーん」

ヨンヨンは、飛び跳ねる。

「はっはは、ヨンヨンちゃんは、食べないから大丈夫だよ」

料理長は、魚の頭を撫でる。

ヨンヨンを見かけるとなぜか撫でたくなる、そんな欲求にかられるのだ。

「おいら、あせったよーん、よかったよーん」

「今日は、お客が急に増えたからなあ。うかつだった……」

しかし、料理長は、いい考えが浮かんだ。

ヤツにたのもう。こういうときのために、あの釣りバカがいるのだ。急に魚が必要になっても、ヤツがいる限り大丈夫なのだ。

しかし、誰が、ヤツの元へ行くのか。

厨房の人は、誰も手が離せない。

しかし、そんな時でも、大丈夫。

料理長は、厨房にある船内の連絡回線で、ヨンヨンの飼い主である船長を呼ぶ。

「あの釣りバカから、魚をもらってきてくれないかな。きつと、今

日も、甲板で釣りをしているよ……あと、ついでに、君のヨソヨソが、ここに来ているから、回収も頼むよ」

回線を切ると、料理長は、別の料理をつくりはじめた。作るものは、何も魚料理だけではないのだ。

連絡を受け、船長である少年は甲板へ行く。

こういう雑用を頼まれるのはいつものことなのだ。

2本のマストに白い帆をたたえた縦帆船は、太陽によく映える。

湖を見れば、今、どこにいるか、どこに向かっているのか、すぐわかるほどに。

こんなに天気が良いと、釣りもしたくはなる気持ちは分かる。

少年は、いつもの場所で、釣りをしてさぼっ……いや、食料調達をしている船員の元へ行く。

食料調達という立派な仕事といえば仕事なので、少年は釣りに関しては、大目にみている部分はあるのだが、彼本来の仕事は、さぼらないでほしいと、常々思ってはいる。

「調子はどうだい？」

どろどろと釣りをしている壮年に話しかける。

「魚を分けてくれないかな？料理で使いたいらしいから」

「あーいよ！お安い御用、今日もたくさん獲れたから、持ってきたな！バケツいっぱい魚を受け取る。釣りの腕はなかなかなのである。」

「こうやって、湖風の中、釣りができるって、すばらしい。釣りは、誰でもできる簡単な娯楽だな」

「娯楽も良いけれど、仕事もね」

「あいよ、船長！」

まあ、返事だけなのは、分かっているのだけれども。

「これだけあれば、大丈夫だろう」

少年は、魚を厨房に届ける。

「おお、ありがとう、いつもすまないね」

料理長は、魚を受け取りと、調理にかかる。

「とんとんとん 包丁は、太鼓の音を奏でて

シヤキシヤキシヤキ！野菜は、フレツシユ1番 リフレツシユ2番

ぱふぱふぱふ ぽんぽんぽん 小麦粉舞う、粉雪のワルツ

じゅーじゅーじゅー ジューシーな旋律は舞い降りる 湖の幸！」

料理長は、歌いながら、次々に魚料理を作り上げていくのでした。

魚の日記「こげつくくらいがちょうどいい！」

とんとんしゃきしゃきぱふぱふんじゅー

みずつみの さちの おとだよーん

おいら さかなだけれど

そ そんな メで みないで ほしいよーん

おいらを たべても おいしくないよーん

おいら ないちゃうよーん

こらーげんなんて たっぷりじゃないよーん

うるこが とても かたいよーん

2・船の上の湖魚（後書き）

船については、あんまり詳しくは知らないけれど、帆船には、縦帆船と横帆船があつて、逆風でも小回りがきく機動性が高いのが縦帆船。

風を効率よく推進力に換えられ長距離航海に向いているのは横帆船だいたいそんな感じらしいです。

今回、縦帆船を選んだのは、湖だから、効率よりも機動性を重視。そんな安易な理由で選びました。

船については簡単に調べたのですが、船に詳しい人が見たら、突っ込みどころ満載な偏った知識なんだろうなあ。

ちなみに、帆船は、トップスル・スクーターとか、バーケンチンの造形が好きです。

3・消えたモップ

「なんも船長」という駄洒落が船乗りたちの間にはあるらしい。これは、船長が悪天候等の非常時や出入港の時以外に、これといって仕事がないからなのである。

この帆船の船長も、例外ではない。普段は本当に仕事がない。少年船長は、操舵の技術はそこそこあるものの、まだまだ体力もない子供で、

実際のところ、船の仕事の面では、あまり役に立たない。だから、実は船長という役職は、実は一番都合良く、しっくりくるのかもしれない。

しかし、仕事が無いからといって、いつも何もしていないのかというと、そうではない。

困っている人がいると、助けずにはいられない性格ということもあり、気がついたら、何か頼まれたことをしている。

そういった経緯もあり、専らの仕事は、雑用係と同じなのである。

今日は、船内で、消えてしまった数本モップの搜索をしている。そんな、ささいなことでも、いやな顔せず、こなすのだ。

船には、客や船員がいるので、雑談がてら話を聞いてみると、子供たちがモップを使って、甲板でチャンバラをしていたと言う情報が手に入った。

船旅は、子供たちにとって、ちょっとしたイベントである。

かくれんぼ、イタズラ、探検と称して、どこにでも入り込む。

気をつけていないと、見張り台のはしごまでよじ登ってしまうのだ。

それくらい元気すぎる方が丁度いいのかもしれないが。

甲板には、すでに子供たちはもういない。しかし、その代わりに、モップが、甲板に散らかっていた。

遊び終わったら、元の場所に戻して欲しいものだと思いながら、拾い集める。

数を、数えてみると1本足りなかった。

そういえば、この場所に来た時から、少し何か違和感を感じている。少年は辺りを見回した。

「……」

その違和感の正体を知ったとき、最後のモップを見つけた。しかし、見つけたモップは、柄の部分だけ。モップは折れていた。半分に。チャンバラをしていて、折れてしまったのだろう。

モップの柄があった場所は、ロープなどを巻いてあるブレイピンが並んでいる場所。

いかにもこれはブレイピンですよとばかりに、モップの柄が船の縁に立てかけられていた。

ご丁寧に、ロープまでそれっぽく巻いてあった。

巻いてあるロープも船では使わないロープで、巻き方も適当なので、少年は、違和感を感じ、気がついたのだが。

「……証拠隠滅の知恵だけは、一人前なんだから……」

モップの柄を回収する。

あとは、モップの房系の部分。それは、近くには、見当たらない。

「さて、どこだろう」

最悪の場合は、湖の中だろうと少年は思っている。

実際その通りだった。

子供たちに折れた柄の証拠を突きつけて、白状させたら、案の定、「湖に捨てた」という回答をもらった。

叱るのもほどほどにして、子供たちを解放した。

湖に還ってしまったモップ。

柄だけでは、それはモップではなく、ただの折れた木の棒。どうが
んばつても、もはや、モップには戻らない。

「1本くらい足りなくても何とかかなるか……」

船の中にある道具屋に、注文すれば数日後には、届けてもらえるし。
とにかく、折れたモップで、子供たちに怪我がなくてよかった、よ
かった。と、そう思うことにした。

魚の日記「おれちゃった」

もっぷさがしを したらしいよーん

もっぷは ばらばらになったり

るーぷに うまったり いそがしいよーん

そして ふさふさが みずうみに なげこまれたらしいよーん

ふさふさは およげないから もう もどって こないみたいよーん

もっぷは みずうみの いちぶに なったけれど

もっぷのゆくえが てんごくだと わかったから よかったよーん

3・消えたモップ（後書き）

どうでもいいことですが、

海賊船の船長の片目がつぶれているのは、あまりに暇なために、望遠鏡で太陽を見てしまうからだと言われています。

本当かどうかはしらないですが。

両目を失った海賊いるのかな……

いや、さすがに、学習するかw

望遠鏡を持っているのは船長だけ。（望遠鏡は権力の象徴らしい）
でも、望遠鏡を覗いてもやっぱり海。

ずっと、水平線なんだもの。退屈も退屈だよね。

海は、何も無いから、太陽も見たくなくなるよね、きつと。

4・動くりんご

船長のお人よしは、船の中だけに限らず、村でも発揮されるので、そのおかげか、船員だけではなく、村人たちからも『湖賊の何でも屋さん』と親しまれている。少年のほうも、それを分かっているので、『職業：何でも屋』という肩書きを自分につけていて、『船長』と言われるよりも、『何でも屋さん』と親しみをこめて言われたほうが嬉しく思っていた。

さて、島では、りんごがなる季節になった。

湖の畔に住む人々は、りんごが大好き。りんごは、森になるのですが、村から歩いていくには、少し遠く、しかも、今の時期、魔物たちも、この森に集まる。魔物もりんごが好きなのだ。

しかし、そこで、なんでも屋の登場！

船があるので、村から人を乗せて、森の近くまで簡単に、安全に、行くことができる。

船で、人を森へ送り届けるだけではなく、魔物から依頼主を守る、その護衛をかねて、りんご取りの手伝いをするのも、仕事の一つ。今の時期、大人気のりんご狩りツアー！

今回一緒にりんごを採るのは、湖に住む貝殻タコさん。長い足と、吸盤で、優しくりんごをつかむのだ！

りんごの森に行くことを知った湖魚のヨンヨンは、「おいらもいきたいよーん」と、言って聞かない。

好奇心が旺盛な魚なので、ついでに行きたいと言つのは、いつものこと。

お出かけ用の移動式水槽（リュックサック型・軽量タイプ）に、ヨンヨンを入れて、少年は背負って出かける。

さあ、湖賊と湖魚と湖蛸のりんご狩りが今、始まる。

森と言っても、小さい世界の森。そんなに広くはなく、迷うこともない。

明るく生命力にあふれた森なのだ。

そんな、森を歩いていると、早速魔物が、草むらから、登場した。

緑色のりんごに似ている生物、ころり転がる巨大な青りんご。少年の背丈の半分はあるだろうか。

「きゃーでたでた」タコの触手が湖賊の少年を襲う。

「ど、どうするよーん？」

「とにかく、剣でたたいてみよう」

タコにからみつかれながらも、少年は、唯一落ち着いてる。

この魔物は、積極的に人を襲うといった凶暴な魔物ではないことを知っていたのだ。

つつくように、魔物を切った。

りんごは、あっさり、半分にすぱりと切れた。

むくむく。と、半分になつたりんごの魔物は、不気味に揺れる。

切り口が、泡立ち、新たな身体が形成されていく。

「やっぱり、増えたな……」

生半可な攻撃は、この魔物の前では無意味である。

というか、タコが絡み付いていて、邪魔で思うように攻撃ができないのだ。

「にげるよーん？」

ヨンヨンの意見に、「逃げよう」と、全員一致、すぐさまその場から全力疾走する。

戦わないで逃げるもの、賢いやり方。

なにも、戦士や狩人のように魔物を積極的に狩ることが生業ではないのだ。

目の前に現れただけで、襲われたわけでもなく、誰かに頼まれてもいないのに、無理に命を奪うことはないのだ。

決して、湖賊が弱いわけではない。

湖に生きる男、湖賊。

戦士や狩人と言った戦いの本職には劣るが、それなりに実力はある。

『念のため』、『強く』、言っておくけれども……本当だよ。ほん
と……

「あんな、まものごとときで、にげるとは、なさけないよーん。めちや、よわパーティだよーん」

魚は、少年に背負われているだけなので、気楽である。

「なによ、逃げようって、最初に言い出したのは、そっちじゃない」
魚とタコは喧嘩を始める。ああ、海洋生物大決戦、いや、海洋生物大決戦。

「し、また魔物が来てしまうぞ」

少年は、あきれながら、そう、言う。これは、静かになる呪文。

こんなことが、ありながらも、無事にりんごを探ることができたのでした。

そして、帰りは、また、同じ道を通らなくてはならない。

そして、また、帰りにも、あの魔物に……

毎年の事ながら、りんご狩りは楽ではないのでした。

魚の日記「かいき うごくく りんご」

ばんゆう いんりよくも まっさおの あおりんご みつけたよーん

あおりんごは うごくくから かってに おちても ふしぎは ない
よーん

ばんゆう いんりよく はっけんの うわさは うそかもしれない
よーん

あおりんごは うごくくし きいろのたいようは おちてこないよ
ーん

あの つくえのうえにある あかいらんごは いつ うごくくのかと
いまから とても たのしみに おもっよーん
わくわく

でも やっぱり こわいから うごくかないで ほしいよーん

4・動くリンゴ(後書き)

4話目まで書いて……

なんだか、まったりしすぎていて、つまらないかな……

りんごといえば、ニュートン。

ニュートンの「りんごの逸話」は、創作の可能性があると言つのは、知っている人は知っていること。

しかも、その逸話も正確に覚えている人もあんまりいない。

(自分もその一人、だいぶ、はしょって覚えている)

自分が覚えている範囲では、

ニュートンは、「りんごが落ちた」から、重力や引力といった『力』の存在をひらめいたのではなく、

「りんごは落ちるのに、何であの空の月は落ちてこないのか」と疑問に思つて、

そこから思考を展開していき、『力』について考えていく話ということぐらい。

はしょりすぎ

知っている人は、もっと詳しく知っているであろう雑学。

5・復元するコップ

この世界の人が集まるところは3つしかない。

まずは、農村ヤチボカ。

畑はもちろん、神が宿ると言われている樹が生えていたり、温泉や図書館があり、村とは言うものの、それなりに栄えている。

その対岸にあるのが、モイ地下街。

その名の通り、地下にある常夜の妖しい街。酒場はもちろん、怪しげな道具屋、謎の店が並んでいる夜の街。

そして、湖を帆走^{はしる}る帆船。

船もひとつの世界であり、もうひとつの島であり、家であり、そして村のようなものなのだ。

この3つが、世界の全てである。

(たまに変わり者が、人里はなれた森の中などに、住んでいることもあるのだが)

そんな閉ざされた小さな世界なのだ。

船長には、航路や行き先を決める権限がある。

今日は、みな羽を伸ばせるように、酒場のある、地下街モイに進路を向ける。

船長である少年は、あまり好きな味ではないのだが、大人たちは、お酒と言つものが好きで、「モイに行くよ」と言つと、

その途端に、いつもの倍以上元気になるのだ。

もう少し大人になれば、そのお酒の良さが分かるらしいのだが……

モイにつくと、少年は、ヨンヨンを連れ、酒場へ行く。

実は、この酒場には、ヨンヨンのマイコップがある。

特に何を飲むわけではないが、目の前にコップがあるだけで、みんなとおそろいの気分を味わっているのだ。

ヨンヨンは、自分だけのコップがあり、様々な人に出会える酒場が好きらしい。

酒場には、すでに人が多く集まっている。

地下にあるこの街に入った時点で、何時だろうと『夜』になるのだ。

「お、湖賊の何でも屋の兄ちゃん、いらっしやい」

酒場のマスターが、いつものように笑顔で迎える。

「ヨンヨンにはいつものを頼むよ」

少年は、ヨンヨンをカウンターのいつもの席に置いた。

「あいよー！」

マスターは、ヨンヨンの前に空のコップを置く。

ヨンヨンは、『ヨンヨン』と書かれた自分専用のコップを眺めて喜んでる。

「酒場は少し乾燥しているから、辛くなったら言っただよ。霧吹きしてあげるから」

「よーん」

酒場には、知った顔の人しかいない。狭い世界、知らない人に会う方が珍しいのだ。

この酒場にいるものは、みな、家族も同然なのだ。

「あ、ヨンヨンだ」

そう言ったのは、オールドビスと言う名前の少年。彼は、かわいいも

のには目がないらしく、ヨンヨンを見かけるたびによってくる。

「こんにちは、何でも屋さん。いつも、オールドビスがお世話になってます」

オールドビスと一緒に席に座る少女のシルルは言う。

二人の年齢は変わらないのに、シルルは、まるで保護者のようだ。

「ふふふ、ああ、ヨンヨン、かわいいなあ」

オールドビスと呼ばれた少年のは、ヨンヨンの頭をなでまくっている。異常なほどに愛情を注ぎ、もはや、何かの中毒者のようだ。

「オールドビス、ほどほどにしておきなさいよ」

「あ……」

パリンと、音がして、コップが割れた。

オールドビスのひじが、ヨンヨンのコップにあたって、コップが床に落ちのた。

「ああ、おいらのコップ〜」

「い、ごめんよ。わざとじゃないんだ」

「おいらのコップ……われちゃったよーん」

「新しいコップ、用意してあげるから……」

オールドビスは、ヨンヨンを慰めようとす。

「おいら、このコップじゃないと嫌だよーん」

嫌々と、駄々をこねる。こうなってしまうたら、泣き止み落ち着くのを待つしかない。

「ど、どうしよう、シルルっ?」

頼りないオルドビス。相棒のシルルに助けを求める。

シルルは、「ふう」とため息をつく。

「この街に復元屋がいるって、聞いたことがあるわ。彼なら直してくるんじゃないかしら？」『復元』といっているくらいなんだもの、コップも直してもらえと思うわ」

「おいらのコップ、なおるのよーん？」

なおるかもしれないと言うことを聞き、落ち着きつつある。

「オルドビス、行ってきたら？」

「一人じゃ嫌だな……この街の奥の方って、暗くて怖いんだもん」物騒と言うわけではないのだが、薄暗くて、入り組んでいて、迷路のような不気味な地下深く。

「シルルも来てよ」

頼りないオルドビス。

「か弱い乙女に頼む？」

うふふと、笑いながら、やっぱり否定しているようだ。

「そうだ、あなたも、ついてきてくれないかしら？ね、『何でも屋さん』？頼りないオルドビスと2人よりも、断然、いいわ」

何でも屋さんと強調され、強制的に巻き込まれることになった。

割れたコップを、袋に入れ、3人は復元屋があると言う地下街の最下層を目指す。

最下層といっても、モイ地下街自体あまり広くはない。

10分も歩けば、最下層なのだ。

『なんでも復元します、復元屋』

長い年月を感じさせる色あせた看板があった。

店の中には、青年がいた。

特に何をするでもなく、店の奥の作業机にひじをついて座り、外を眺めていた。

「おや、いらっしやい」

店の外で、躊躇している3つの影に気がつくと、青年は、立ち上がり、出迎える。

「はじめまして、少年少女たち。私は復元屋のアラク」

あまり寝ていないのだろう、目の下にはクマがある。

ずっと、地下にいるからだろうか、肌は怖ろしいほど白く、暗闇に映える。

「何か困ったことでもあったのかい？何か復元してほしいものがあるとか。ないとか。何でも、復元してやろう……」

人形のような美しい表情は、赤い唇は笑みをつくるが、ますます無機物のよう。

「こ、このコップ、頼めますか？」

オルドビスは、少し震えているようだ。無理もない、オルドビスは弱虫なのだ。

青年の生気を感じない不気味な気配にすっかり怯えている。

「ああ、できるさ。……限りなく本物っぽいモノにね」

「その『限りなく』ってのが、気になるんですけど
シルルは、思わず突っ込む。」

「くくく、その件に関しては、ノーコメント……」

アラクは、やはり無表情に唇の端を上げ、笑みを浮かべた。

不安は残りながらも、割れたコップの入った袋をアラクに渡した。

「割れたコップの復元……やってみよう……」

半そでから覗く左腕には、変わった紋章の刺青がしてある。

「この壊れてしまったコップ……あつという間に、この通り！元通り！」

どんな手品、どんな魔法を使ったのか分からないが、気がついた時には、目の前のコップは割れていなかった。

「さあ、復元しました」

復元されたコップを受け取った。

まるで、最初から割れていなかったかのように。ヒビ一つ入っていない。

「どうです？限りなく元通りでしょう？」

『限りなく』という言葉が気になるが、確かに受け取ったものはコップであった。

「すごいわねえ」

シルルは感心している。

「ありがとう」

復元屋は、笑みも浮かべず言う。

「ところで、あんまり、出歩かないんですか？今まで、お会いしたことがないので」

船で村々を渡り、人を運ぶと言う仕事をしている職業柄、会ったことがない人がいることは、とても新鮮なのだ。

「私は、基本的にこの店からは、出ないからね。あまり、人間と関わるのは得意ではないんだよ。そう、だから、

人があまり立ち寄らないモイの最下層に店を構えている」

確かに、最下層にあるこの場所は、用がない人間以外は訪れないだろう。

「しかし、君たちのことは少しだけ知っているよ。……君たちより先に生まれ、長く生きているからね。

何回も経験しているよ、子供が生まれた時の、あの、島を揺るがすような大騒ぎ……

地下深くに籠っている身とはいえ、私の耳にも、その情報は入ってくる」

確かに、子供が生まれたとなれば、島の人総出でといっているけど、全ての者が祝福する。

島は3日3晩、お祭り騒ぎ。人里離れていても、どこの家でなんという名前の子供が生まれたのが、分かってしまう。

「ああ、数年ぶりに人間と会話したら、久しぶりに、外へ行くのも悪くないような気がしてきた。湖は、美しいままなのか。

太陽は輝き続けているのか。昔と変わらず全てそこにあるのか」
言葉の節々に、奇妙な表現はあるが、全く付き合えないほど変わった人ではなさそうだ。

「その時は、ぜひ、船をご利用下さい。湖のどこにでも案内しますよ」

別れ際、営業も忘れない。

「ああ、そうするよ」

「それでは、お元気で」

「ああ、また復元して欲しいものがあつたら、来てくれ……」
そう言つて復元屋と別れた。

酒場に戻つて、ヨンヨンにコップを渡す。

「これは、まちがいなくおいらのコップだよーん。なおつたよーん！もどおりよーん！すごいよーん、さすがよーん！」
復元されたコップを、眺め、ヨンヨンは喜んでいた。

魚の日記「たいせつなもの」

たいせつなものを うしなつて それは かなしいことだよーん

おいらの たいせつな コップ

わつたのは おいらを たくさん なでなで してくれた おかた
だつたよーん

コップを なおしてくれたし

ほんとうは わるいひとでは ないのを おいらは しっているよ
ーん

とても あいを かんじたよーん

あのひとは おいらを あいし おいらは コップを あいして
これつて あいの すれちがい？

コップのはへんは するどいよーん
きをつけないと やけどどころか きりきずだらけだよーん

あいはいへんなんだよーん

2009 | 312 ^

5・復元するコップ（後書き）

復元。

どこまで復元するのがいいのか、というのは、博物館の学芸員や修理屋さんの悩みの一つ。

復元は、ひび、やぶれ、カビ、汚れなど、欠けた部分や汚れた部分は、補い、綺麗にして、『元の姿』にすることが求められる。

しかし、だからといって、完璧に復元してしまうわけにもいかないらしい。

失われているから、傷がついているから、美しいこともある。

そう、机の傷や柱の傷が思い出になるように。

少し汚れたアンティークの家具に趣があるように。

サモトラケのニケや、ミロのヴィーナスの欠けた部分に想像力をかきたてる力があるように。

失われたものには、何か、『心』動かすモノがあることも、忘れてはいけないのです。

復元は、求められる『元の姿』を見極め、そのモノが持つ記憶とのバランスが求められる難しい仕事……

6・巨大なしゃもじは空をとぶ（前書き）

意味不明の極み（？）の話。

しゃもじが空を飛ぶこと。誰にも理解されなくても良い。自分はそう云うのが好きなんから！

……でも、半年位したら、自分も、理解できなくなるかも。

一時の、ハイテンションのなせる恐怖：

6・巨大なしゃもじは空をとぶ

農村ヤチボカには、温泉がある。

夜の街モイで酒を飲むのもいいが、疲れを取るのは、広く温かいお風呂が一番。

村に湧く温泉は、温度が高く、入るには熱すぎるが、水では薄めない。

適温にするために温泉を湯棒でかきまわす湯もみをしている。

湯もみは、重労働なのだが、村の娘たちが主に携わっている仕事だ。これが名物の一つで、これのために、毎日温泉に来ている人もいるくらいなのだ。

村の広場で、その湯もみの娘が困っていた。

お節介の少年は、見てみぬ振りができない。彼女に近づき、話しかける。

「あ、何でも屋さん？大きな木の棒を持った子供たち見ませんか？」

どうやら、仕事で使う大切な湯もみのための道具「湯棒」を、いたずらっ子が持って行ってしまったらしい。

モップのときと言い、今回の湯棒と言い、子供たちは棒が好きらしい。

冗談はさておき、少年は一緒に探すこととした。

結局、いたずらっ子は、捕まえられなかったのだが、湯棒の所在は分かった。

村の外れにある樹の下に、それはあった。

「それにしても、なんでこんなことに？」

二人は、今、そのご神木の前にいる。この大木は、神の宿るご神木として、親しまれている。

木の棒らしいものが、その樹の根元の地面に刺さっていたのだ……

「ああ……」

無残な姿の湯棒を、一刻も早く救い出さなくては！

しかし、抜こうとしたのだが、どうも、不思議な力が働いていて、無理そうだ。

「なんでぬけないの！」

二人がかりで、がんばっても、巨大なしゃも……いや、湯棒は動くとうとしない。

湖賊の少年は、前から思っていたのだが、湯棒と言うものの巨大なしゃもじにしか見えなかった。

巨大な樹の下の巨大な……

「……そのしゃもじのような物は、大地に根付き、力を得ている。人の手で、抜くことは、もう、できないよ」
背後から声がする。

いつの間にか、白い服を着た人物が立っていた。しゅりりり、だ。しゅりりりは、村に住んでいない種類の人間で、たまに村にいるのを見かける程度。

どこら辺に住んでいたのか尋ねても、要領を得ないし、謎が多い人

なのである。

しかも、神出鬼没。船で会うことはあまりないので、きつと陸地を移動しているのだろう。

「しゅりさん？いつの間」

もはや、いやな予感しかしない。

しゅりるりが現れること、それは、何かが起こる前触れ。

それ自身が天災、いや、人災のようなもの。

いつも、何か変な、不可解でおかしな雰囲気を引き連れてくるのだ。

「ここに奉られている大木は、大地を支える封印木^{シキリア}。この土地は、神聖な力に満ちている。今はこのしゃもじにも、その力の一部が流れているんだよ……」

突然、しゅりるりは、大地にひざをつき、称える祈りをささげる。

「月の引力が弱まる時、上弦の月に封印木は芽生える。次の満月に^{グラビティシン}は月の魔力を蓄え、下弦の月に記憶を残し、新月の夜に息絶える」
なにやら、呪術のような呪文のような文言を唱え、即興で、簡潔な儀式をはじめている。

「ああ、なにをしているんですか？」

湯もみの娘は、急なしゅりるりの行動に戸惑う。
無理もない。

しゅりるりに会う人は、全て等しく、みんながみんな、奇人変人な行動に振り回される。

この、しゅりるり、と言う人に、会った人は、大抵、永遠に忘れられないかなり常識逸脱な印象が記憶に残るのだ。

「せっかくだから、崇め奉ってみようかと　まあ、適当に、だけれどね」
そういうと、再び、深々と、大地に跪き、同じような呪文を唱えるのでした。

特に何が起きるわけではないが、異様な雰囲気には、包まれる。

「みんなも、やろうよ?」
しゅりるりは、誘うが、やはり、誰も加わろうとはしなかった。

しかし、
そのとき、奇跡は起きたのです……

カミナリの煌きの様な、辺り全てを照らし出す光の強さが、一瞬。

「なんだ、なんだ?」

しゃもじが、ゆっくり回転し、あれほど固くしっかりと埋まっていた地面から、いとも簡単に脱出し始める。
地面から、完全に出たところで、回転が止まる。
ぐらぐら揺れて、このまま、重力に任せて、地面に倒れこむのかと思いきや、ゆっくりと浮かび始める。

目の高さ、身長よりも高く、徐々に、そして、やがて、樹と同じ高さ。強大なしゃもじは、浮かんでいる。

しばらくその空中に停滞する。

見上げる3人。今起きている現象に対し、どうすることもできない。

3人を見下ろすしゃもじは、見送りに感謝するかのよう一回、ゆらりと大きく揺れると、淡い光に包まれ、螺旋の残像を残し消え去った。

そう、しゃもじは、遠いところへ、飛び立ったのだ。

「ああ、びつくりしたねえ」

まるで、予想外のこと起きたかのように、しゅりるりは言う。
それは、こちらの台詞である。

「それにしても、すばらしい。大地の力を借りて、進化したしゃもじ。……もう戻ってはこないだろう。あのしゃもじはもう、自由なのだから」

しゅりるりは、一人感嘆としている。

湖賊の少年と湯もみの娘は、今起きた出来事についていけない。

「そうだ、しゃもじがないと、困るよね?」こんなこともあるのかと『準備していたものがあつたんだ』

どこからともなく現れた、巨大なしゃもじが、何の前触れも無く、しゅりるりの手の中にある。

「これはご神木に似た樹『封印木もどき』で作ったしゃもじ。湯もみの娘さんにはこれをあげよう」

何はともあれ、湯もみの娘は、巨大しゃもじを手に入れた!

湯もみの娘は、何を、どう突っ込んだらいいのか分からなかった。
「……………だから……………あれは、しゃもじではなくて……………」

魚の日記「でも、やっぱり、しゃもじ？」

じゅうたん ほつき ふうせん ききゆう

そらをとぶものは ゆめいっぱいだよーん

そらをとぶのは ゆめだけど

でも やっぱり

しゃもじは そらを とばないと おもっよーん

> i 2 2 3 1 | 3 1 2 <

6・巨大なしゃもじは空をとぶ（後書き）

シギラリア
封印木

高さは40メートル近くにもなる大変巨大な樹なのです。

実は、石炭紀後期に栄えたシダ植物で、世界の主要な石炭の根源植物のひとつ。

そう、今使われている石炭は、封印木なのかもしれないのです！
ちなみに、封印木は、名前の響きが好きなので、そういう意味でも、使いました。

どうでもいいことですが。

しゅりるりは、「くるくる編」の主人公です。

出さか出さないか迷い、結局出すことに。だって、使いやすいんだもの。

どこにいてもおかしくないし。いや、どこにいても、おかしいことになるけれど。

興味があったら、「くるくる編」も読んでみてね（これは、宣伝）

7・ひよじびよじ(前書き)

葛西臨海公園にある水族館で、まぐる見てきたよ。くるくる回るまぐるは、大きかったです。

ああ、あの狭い水槽の中でも、あんなに速く泳ぐこともできるのかと、関心しました。

ずっと見ていられますよね、魚の遊泳は。

ちょっと疲労気味、でも、テンションはまぐる。

……という、コンディションのもと、書きました。

7・ひょうびょうびょう

湖、唯一の縦帆船は、基本的に、風に身を任せ、湖を遊覧している。気ままに湖を帆走^{はしる}る帆船に用があり、来て欲しい時には、呼ばなくてはならない。

そのための方法で、一番よく使われている方法は、湖岸で船呼びの合図に使う煙を焚く方法だ。

風の方向にもよるが、どんなに遅くても、半日以内のうちに船は、迎えに来てくれる。

島に住む人にとっては、身近で、大切な交通手段なのだ。

今日も、船呼びの煙が上がった。

村ではない、あまり人が寄り付かない森の方角だ。

そこは、霧の森。

常に、霧を生み出している森。

視界が非常に悪く、道には迷いはするが、小さな森。二度と出られなくなるほど恐ろしいところではない。

なぜここだけ、常に霧が立ち込めているのかは謎だし、何があるのか（逆に、何も無いのかもしれないが）、詳しくは誰も知らないこの世界の最後の秘境とっていい。

狭い世界とはいえ、まだ、未知なる所はあるものなのだ。

そんな、森の湖の畔に、人が立っている。

風になびく白衣、淡い紺青の髪。その人物は、今まで会ったことがない人だ。

この狭い世界で会ったことがない人に会うことは、めずらしい。

職業柄、様々な場所で人と会い、この世界の誰よりも、人と会っているので、なおさら。

最近、普段、あまり会うことのないような人に逢うことが多くなっ
た。

何かが起ころうとしているのだろうか？

そんなことを思いながら、船を湖岸につける。

乗って来た人物は、中性的な顔立ちで、全てが霧をまとったような
淡い白さの雰囲気を持つ人物だった。

「こんにちは、」

その声は、幼い響きがあった。長身ではあるが、その人物が、未だ
幼いことを示していた。

「どこまでいきますか？」

湖賊の少年は尋ねる。

「……向こうに、向こうの村に、」

白い指は指し示す。ヤチボカの村を。

「ヤチボカ村、ですね？」

「そう、その村に、迷い雛子ひよこがいるんだ。可愛い雛子……可愛いかあいでそう
なな、」

「その雛子を、探しにわざわざ村へ？」

「そう。全て、……ミテいたから、」
不思議なことを言う。

森から村はなんとか見えるが、よほど目がよくて、日の光が邪魔

をして、小さな雛なんて見えるはずがない。そもそも、人の姿さえわからないのだ。
どうやって見ていたというのだろう。

「特別なんだ。ボクの目は、」
日の光で、青銀色に輝く長い前髪の下、赤い瞳が印象的に瞬く。

その瞳が、船の上を歩く小さな生物をとらえる。

「……おや、湖魚がいるんだね。この船には、」
甲板を散歩しているヨンヨンを見て、言う。

自分のこと話題にさせていることに気がついたヨンヨンは、二人に近づく。

「おいらは、ヨンヨンだよーん」と、自己紹介する。

彼（彼女なのかもしれない）は、微笑むと、「テースキラ、」と名乗った。

そして、細い手はヨンヨンを抱きかかえた。

「この船に、住んでいるの？ずっと、」

テースキラは、ヨンヨンに問う。

「そうだよーん」

「ボクは、霧の森の中に住んでいたんだよ、ずっと、」

話によると、テースキラは、霧の森に住んでいるらしい。
あんなところにも、人が住んでいたのかと思う。彼は、かなり変わった部類の人間なのだろう。

彼のような、あまり村で見かけない人には、たまに会うのだが、普

段どこにいて、どのように生活をしているのか全く分からない。
外とあまりかわりを持ちたくない人たちが集まる秘密の村でもあるのだろうか。

あの霧の森に、モイの地下深くに住む人たちのような。

風は順風。

風をいっばいはらんだ船は、あっという間に船をヤチボカ村まで運ぶ。

「船、少しだけ、待っててもらえるかな？ 雛子を、拾ってくるだけだから、」

着たばかりだと言うのに、まるで、雛がどこにいるのか、知っているような風。

船を下りると、テースキラは、何の迷いもなく歩き出した。

数分後、テースキラは、無言で、船に戻ってきた。

手には、小さな毛並みもあまりよくない黄色い雛が。目をつぶって、口を開いたまま、鳴きもしないでただ震え、ている。だいぶ弱っているようだ。

今にも、命の火は消えてしまいそうだ。

「……………」

湖賊の少年は思う。もう手遅れかもしれないこの雛は。

しかし、テースキラは、悲しい表情はしていない。

「……………この状態なら、まだ、間に合うかも。友人の復元屋なら、まだ、大丈夫なはずだ。この雛なら、」

「復元？ モイの？」

復元屋といえば、ひとつしかない。

あのモイ地下街の最下層に住む、変わり者の復元屋のことだろう。復元屋にならコップを直してもらったことがある。

「彼に会ったことがあるのか。なら話は早いね、」

「でも、雛子を？」

湖賊の少年は、気になって仕方がないので、ついて行ってもいいか、尋ねる。

「かまわないよ。べつに、」

今すぐにでも、出航したほうがいいだろう。

雛は、あまり良い状態とはいえないのだ。

モイはヤチボカの対岸、風向きは、悪いことに、逆風気味。

船は、順調にモイまで……とはいかない。

風が吹いてくる方向に向かって、帆船は、帆走らせることはできないのだ。

うまく帆の向きを変えながら、可能な限り風に向かって切り上がりながら、ジグザグに、進んでいくしかない。

それは、それなりに時間がかかってしまう。

ヨンヨンは、雛が心配になり、テースキラがいる休憩室へ行く。

休憩室にはテースキラ以外の人の姿はない。

大半の船員たちは、今、甲板で帆を操作するため出払っているのだ。

「ひよこ、だいじょうぶよーん？」

休憩室に飛び込んだ、ヨンヨンはそこで見た。

テースキラの瞳が、くるくると、輝いているのを。身体が、白い霧と化しているかのように揺らめいていたのを。

「よーん？」

「……、ああ、ヨンヨンちゃんか、」

いつの間にか、テースキラの体は戻っている。何事もなかったかのように。

ヨンヨンには、何がなんだか分からなかった。

「なにしてたんだよーん？」

「大気循環に外部から干渉して、空気の流、」

そう途中まで言っただけはみたものの、テースキラは、どう説明したものかと、考えているようだ。

「……つまり、風と友達なんだよ。ボクは、」

テースキラの赤眼は細く、微笑んだ。

「これは、秘密だよ、ヨンヨンちゃん。ボクと君、ふたりだけの、」

……風の向きが、変わってきている。

「この風ならば、思ったよりも速く着きそうだ」

湖賊の少年は、一安心する。

不思議なことに、今日は、風の流れが味方している。天が雛を助けるためなのか。

「途中で、また風が変わらないことだけを祈ろう……」

今は、あの雛のためにできることとだけなら、それだけしかないのだ。

モイ地下街に着いた。

相変わらず、モイは酒場のある商店街だけが賑わっている。

地下1階のフロアを過ぎてしまえば、そこは、薄暗く、人の姿はない。

自分たちの足音だけが響いている。

『なんでも復元します、復元屋』という古びた看板が見えてくる。地下街の最下層だ。

そこには、ぽつんと、一軒の店がある。相変わらず入りづらい雰囲気、薄暗い店である。

人の気配に、店の奥から、アラクが出てくる。

「ここは、復元屋。コップや、剣はもちろん、生き物も、限りなく元のとおりに、復元しますよ……」

相変わらず、不健康そうな、眠そうな黒い瞳が気だるそうにしている。

「む、誰かと思えば。……君が、あの森から出てくるとは、めずらしい」

表情一つ変えず、昔からの友人との再会を懐かしんでいた。

「過去の記憶が騒ぎ出して……大気が震えている。運命の星の気配にいずれたどり着く。この小さな世界が湖が揺らいで、瞬いていて、

「そうか」アラクは、そう、短く言った。

意味不明だが、ただそれだけの会話で、多くを語らなくとも、この二人には、伝わる何かがあるのだろう。

アラクとテースキラ、二人並んでみると、そこは不思議な空間に感じる。

日のあたらない地下に住む生物の世界のような。

二人の肌は、濃く暗い地下街の中にあっても、闇に染まることなく白く淡い。

類は友を呼ぶ。湖賊の少年は、そう思った。

「それはそうと……」
アラクは、本題に入る。

テースキラから、弱った雛を受け取った。

「雛子の復元か…… やってみよう……」

そして、その雛を机の上にそつと置いた。

「この動かなくなった、雛子……」

アラクは、雛に手をかざす。

どんな仕組みで、どんな働きによって、それが起こるのかわからない。

「あつという間、このとおり、もともとおり！」

やはり、注意深くよく見ていても、分からない。

息も絶え絶えであった雛が、もう元気よくひよひよと歌っていた。

雛は、無事に復元された！

それにしても、「ひよ、ひよ、ひよ、」と棒読みに鳴く雛……

何か、何かが、違うような……

「『普通』というのは、先入観の問題なんだよ。これは、間違いない雛子であり、限りなく雛子に近い……」

アラクは、そう言うのだが、湖賊の少年は、何か納得できないでいた。

魚の日記「それって、ぴよこ？」

かぜさんと おともたちの てーすきらさんが

ひよこさんを よみのくから つれもどす
ふしぎで そーだいな ものがたり？
だったような きが するよーん

あんまり ひんぱんに おともだちに たのみごとを したのが
わかつちやうと

しすてむさん？とか ししょうさん？に おこられちやうらしい
よーん

だから ふたりだけの ひみつのやくそく なんだったよーん
でも おいらには むずかしくて よくわからなかったよーん

> i 1 8 8 7 | 3 1 2 <

7・ひよこびよびよこ（後書き）

ひよここといえば……『卵が先か、鶏が先か』という問いがありますよね。

卵から生まれるのがひよこでありそれは、鶏になる。

しかし、その卵を産んだ親は、鶏の1つ手前の生物であって、鶏ではない可能性がある。

そのニワトリの卵を産んだのは、ニワトリ一歩手前の雄と雌の鳥。そうかんがえると、親が何であろうと、卵に鶏になる生物が入っているのだから、卵が先と言うことになる。

その卵から、ニワトリの歴史は始まっていくのです。

そして、鶏の卵は確実に鶏になるけれど、

鶏が産む卵は、鶏にならないこともあるのではないかと思うのです。1万年後とかには。親は鶏だけれども、それが産んだ卵からは、鶏ではない生物が生まれる可能性だってあるのです。

しかし、鶏の卵になるためには、雄鳥の精子と雌鳥の卵子が卵よりも先……と、考えると……？
思考はおわらない……

8・世界の隅を求めて（前書き）

自分は、すみっこと、はじっことでは、すみっこのほうが、だんぜん
すぎです。

8・世界の隅を求めて

一つの島、ひとつの湖しかない世界には、どうでもいい悩みがある。

湖の中心に島があるのか、島の中心に湖があるのか。

それは、学者の間では、永遠のテーマであり、長い間論争になっている。

使用している地図に関して言えば、多くの人は島の形が分かる『湖の中心に島がある地図』を主に使っている。

船乗りは、一生のほとんどを湖の上で過ごしているだから、彼らからすれば、湖が中心なので、

湖を航海する人は湖の形が分かる『島の中心に湖がある地図』を主に使っている。

実際のところ、湖と陸どちらが地図の『地の部分』になるのか論争は、学者くらいしか気にしていない、そういった感じではある。

「地図では、どこが世界の隅か分からないね」

船の客室で、3人の兄弟が、2枚の世界地図を広げて、議論している。

今朝、船に乗ってきた兄弟たちだ。

本当は、4人兄弟なのだが、四男だけは村に残り、船には乗らなかつた。いわゆる、留守番らしい。

この兄弟は、決して仲が悪いとか、四男にだけ意地悪でとか、四男が難しい年頃と言うことではなく、

本当に、仲がとても良い兄弟で、船着場で、四男と別れるときも、

「お前も、来れば良いのに」と、兄である3人は、最後まで、一緒の船旅を勧めていた。

長男、次男、三男が旅立ち、四男が残った理由は、兄弟のある共通の価値観、そして今回の旅の目的に由来する。

この兄弟は、それぞれ、理想の『すみっこ』と言うものを持っていて、

各自の理想の隅を求めて旅に出かけるらしいのだ。

「すばらしいすみっこが見つかるの良いね。家の事は心配ないから。いつてらっしゃい、兄さんたち」

四男は、そう言って、笑顔で、兄たちを見送っていた。

「……落ち着いて、静かで……誰にも気にされない……なにもないすみっこ……すみっこ……」

そんな理想を持つ長男は、モイで降りた。

あまり、人付き合いが得意ではない長男は、にぎやかな商店街には、見向きもしない。

商店街の外れ、人のあまりこない静かな倉庫の空間。

ひとつの空き倉庫の隅に、長男は惹かれた。

長男は、数個のタルと寝床となる絨毯を一枚だけ購入し、倉庫の隅に敷く。

「……ここは、いい……」

タルと絨毯と自分以外何もない倉庫、自分の世界。

長男の隅は、こうして無事に見つかったのだ。

「大自然の中のすみっこおおおお」

そう叫び次男は、湖に飛び込んだ。どうやら、岸に丁度良い洞窟を見つけたらしい。

「何も飛び込まなくても……」
湖賊の少年はつぶやいたが、それだけ、隅に対して、情熱を持っているのだろう。

次男はその洞窟の隅を拠点に、大自然の中のちょっとした隅を見つけてはその隅に座っているらしい。

……という、風の噂を聞いた。

「すみっこにいなながら、移動できる方法。それは船の中にある！」
そう言つて、三男は船の隅っこに居座つた。
日よつて、時間によつて、いる場所は変わるのだが、いつも隅にいる。

いつの間にも移動しているのか、誰にも分からない。
誰の迷惑になるわけではないので、放置気味だ。

隅を愛する兄弟たち。彼らの旅は、隅を見つけることだけで終わらなかつた。

兄弟の絆を利用した、新たな産業、流通ができたのだ。

次男は洞窟の片隅で、様々なきのこを栽培しているらしい。時々、立派に育つたきのこが、船にいる三男宛に届く。

そして、三男は届くきのこを長男のもとに運んでいる。

長男は、三男が運んだきのこを乾燥させたり、煮込んだり、そうしたモノを、モイの片隅で作っている。

長男が加工したものを、やはり船にいる三男に届け、加工品は四男のもとへ。

長男の加工するきのこは、すばらしくおいしいので、四男はヤチボカ村の自宅に小さな店を開き、

珍珠『隅のきのこ』として、売っているのだ。
今ではちよつとした名物になっている。

みんな、それぞれ、理想の隅と言うヤツを満喫しているようだった。

時々届く兄たちの愛情がこもったきのこの加工品を見ながら、村の家にひとり残った四男はつぶやいた。

「四角い部屋には、4つしか隅はない。ぼくら4人兄弟、丁度四隅に納まる。ぼくは、みんなが元気でいれば、それでいい」

部屋の四隅のうちひとつに立ち、恍惚と他のすみっこを見る。

「やっぱり、我が家のすみっこが、一番……」

世界の隅っこは、自分の家。

ここが全て。はじまりとおわり。それがすみっこ。

魚の日記「すみっこちゃん」

すみのひとたちは すみっこにいるよーん

すばらしい すみっこをもとめているよーん

すたこらさつさと すみかをでて

すみをさがして すきなようにたびだったよーん

すみっこって すてきなものなのかよーん？

8・世界の隅を求めて（後書き）

この世界の形は、球体なのか、平面なのか、ドーナッツ型なのか、それとも、なにか不思議な次元に浮かんでいるのか。

この世界の、ありえる形は、球体の中にあること。

それは、球体の外側にあるのではなく、球体の内側に湖と島がある形。

そうすれば、どこにいても、湖が見え、船も見えます。

球体の中心に、何か明るいものがあります。それがきつとこの世界の太陽なのでしょう。

これなら、酒場が地下街にある理由もなんとなく分かります。

きつと夜がないのでしょうか、この世界には。

……海だけではなく、夜や月もない世界になってしまった。

なんか、色々中心にたまりそう。地面の土を掘っていったら、外（宇宙？）に出してしまうのか。

中心の太陽はどうやって浮いているのか、まだ謎の残る世界。

そう考えると、世界の形って、不思議です。

9・奇麗なお菓子、魅惑の肉球（前書き）

リニューアルに伴い、なんだか色々変わっていて、大変でした。挿絵も入れてみました。無駄に。

名前のあるキャラは、この話までで、全て出揃います。

基本的に、名前のないキャラは使い捨て（？）で、1話限り、1回しか出てきません。

名前のあるキャラは、他の話に再登場します。

まだ、名前が明らかではない湖賊の少年……もしかして、毎回使い捨てられていて、毎回違う人物で、今回で9人目？

……と言う冗談はさておき、9話目をお楽しみください。

9・奇麗なお菓子、魅惑の肉球

「どうしたものか……」

湖賊の少年はため息をついた。

目の前にいる、二匹の白狐の子供を捕まえない、空回りな自分の手を見ながら。

すばしっこいうえに、物陰にも入り込む。

そして、何よりも、都合が悪いことに、この肉球が邪魔をする。

白い毛の中に埋まっている肉球のある手のせいだ！

湖賊の少年は、もどかしい気持ちになる。

普段は、あんなに愛らしい肉球も、このときばかりは、憎らしい。

そもそも、こんなことになったのは、この二匹の白狐が道具屋の商品を盗んだことに始まる……

いつものように、船の中にある道具屋の主人は、店の商品の在庫確認をしていた。

道具屋の壁に提げている鞆から、チラリと覗く派手な色の包装紙。

船の荷の陰、それを見つめる二つの影があった。

白い狐だ。

村にある小さな祠に住んでいる。

白くてきれいなふさふさの胸毛が生えているのが「房殿」と言う名前前で、

玉の首飾りをしているのが「玉殿」と言う名前の白狐の子供である。わりと、そのままの名前なので、分かりやすいと言えば、分かりや

すい。

「あのお菓子、狙うですうー」
「ですう」

房殿は焦らず緩やかに、派手な着色の短剣のような物を取り出した。
「じゃーん。秘密兵器『シウルシウル棒』ですうー」

『シウルシウル棒』とは、もちろん房殿が勝手に付けた名である。
その棒は、祭りの玩具屋で、よく見かける物である。実際の名前は
『カメレオン』という名称だ。

長い紙を巻物状に巻いて作られており、シウルシウルという摩擦音
と共に伸びる棒のことである。

紙でできた、ヨーヨーのようなものだ。

紙製の特徴でもある壊れ易さにより、三日も経たないうちに壊して
しまう人が多い。

誰でも簡単に入手できるが、気が付くと手元には無い。
そのような極稀^{レア}な道具を、房殿は今持っているのだ。

房殿は『シウルシウル棒』を振り回した。

棒の先に細工がしてあったらしく、鞆の中のお菓子は、棒に貼りつ
き、房殿の手に落ちていく。

「お菓子、もらっていくですうー」
「では、さよならですう」

玉殿が、煙の玉を投げる。

「デロデロデロデロデンデロン　ですう」
逃げる方法だけはしっかりと、確保している。

「あ、こら、まちなさい！」
道具屋の主人が気がつき、そう言うまもなく、白狐たちは、どこかに走り去ってしまった。

「ああ、あの商品は、子供にはまだ早いのに……」

誰も追いかけてこないことを確認すると、二匹は、戦利品を分け合う。

「綺麗なお菓子、たべますうー」

「奇麗なお菓子、おいしそうですう」

一口で、頬張るお菓子。

二匹に、異変が襲う。

「……あはははは……ですう」
「まわるですう〜くるくるくる」

偶然、向こうから歩いてきた湖賊の少年にぶつかる。

「おおと、大丈夫かい？」

「だいじょうぶですう!!!!!!」
妙なハイテンション。

少年は、なんだか嫌な予感がした。

「キツネシヨ〜するですう」
突然そう言うと、二匹は、手と手を取り合う。

「こちらは、玉殿ですうー」

「こちらは、房殿ですう」

お互いが、お互いを紹介する。

「ふたりは、たまふさ！」

そして、二匹は、左右対称な決めポーズを決める。

玉殿と、房殿は、キツネに伝わる、魔法の葉っぱを、少年の湖賊の頭に乗せてみた。

どろん！と、少年の頭の上で音を立てる。

視界が、白い煙に覆われる。

「わ、何するんだよ」

煙を振り払う。

だんだんと、視界が良好になるにつれて、その身に起きた変化に気がつき始める。

周りの風景が、一変している。

床が近い、天井が高い。

すべてのものが大きい。

「な？一体、何をしたんだ！」

きよるきよるしていると、床についてる自分の手が、ふと見えた。

白いふさふさの毛並み。曲がった獣の爪、肉球。

これは、猫。

白い猫。

「わ、猫になってる！」

思わず、叫ぶ。

「こ、こいつ、語尾がニャーじゃないですうー」

「……………ですう」

何を期待していたのかは、大体想像はつくが……

「夢物語の見すぎだね……………」

さて、いつまで、猫の姿でいなくてはいけないのだろうか。

白い毛に覆われた肉球の手を見つめ、少年は、ため息をつく。

「どうしたものか……」

そして、再び、ため息をついた。

……結局、元の姿に戻ったのは、一晩たって、朝になってからであった。

少年は、疲れて眠っている幼い2匹の狐を、村にある棲み処すみかに、そっと帰したのでした。

魚の日記「おかし〜!!」

おかしをたべると げんきになるよーん

それって あぶないおかし？ それって はんざい？

きつと ゆめみるおかしだよーん

ふたごの「どの」どのは にここにしていたよーん

まだ たくさんかばんに きけんなおかしが はいっているよーん

みつゆ っていうの しているのしれないよーん

あぶないよーん

> i 1 9 1 7 | 2 3 <

9・奇麗なお菓子、魅惑の肉球（後書き）

お祭りで売っているカメレオン（ペーパーヨーヨー）。

この名前を知ったのは、高校生になってから。

それまでは、ずっと、シユルシユル棒と言っていました。

自分は、このカメレオンが大好きで、大抵、2、3本買います。

1本が壊れる頃には飽きるので、余ったやつは箱の中。

半年後くらいに、見つけて、また遊ぶ。その繰り返し。

今も、1本（新品）、箱の中に入っているはず。

10・海を求めて、見る夢に。(前書き)

今回から、なんと、本格的に、世界の謎に迫ってしまう流れ？
いつもとは、ちょっと違う雰囲気？

今回は、ありがちな神話伝説的なものを延々と語っています。
神話伝説という名の『設定』語りです。

10・海を求めて、見る夢に。

ここはヤチボカ村の図書館。

世界ができた時からあるという非常に古い図書館である。

『海』について知りたいのなら、ここで調べるといのが定番である。

図書館には『海』について書かれている文献がたくさんあるからだ。

この図書館のおかげで、一つの湖と、一つの島しかない世界に住む多くの人々でも、『海』という単語だけは知っている。

しかし、本当の『海』を見たことがない人しかいないので、実際のところ『湖』との違いは、漠然としか分からず、詳しくは分からないのだった。

文献には、『海』とは満ち引きがあり、水に味があり、渡るのに何十日もかかるほど、とてつもなく広いと書かれている。

大きさの事はとにかく、湖の浜に行けば波はあるし、水の味に関しても、山を流れている水と、湖と、雨とでは水の味が違うことを知っている。

……普段はあまり気には止めていないが。

それでも、『海』のそれは、想像以上のものらしく、時として波は全てを飲み込み破壊するモノに豹変することもあったという。

そして、味に関しては、なめてみれば、はっきりとしゃばい味と感ずるのだという。

汗と同じような味らしいと言われているが、湖よりも大きく広い場所に溜まっているというのも、なんだか想像できない。

文字の上では、そういうものだと理解できても、想像の上では、

なんとも理解できない代物なのだ。

そんな、『海』についての文献が豊富な図書館に湖族の少年はいた。

例によって、何でも屋さんの仕事を……今日は、文献探しのお手伝いをこなしているのだ。

湖魚のヨンヨンを連れて、

(例によって、ヨンヨンは図書館に行きたいと言い出したので図書館に行くと、シルルとオールドビスがいた。

二人とは、モイの酒場で会って以来だ。

あの時は、オールドビスがヨンヨンのコップを割ってしまって、ちよつとした冒険と言うのか、探検をした。

今となつては、いい思い出の一つである。

「あ、ヨンヨーン」

オールドビスは、ヨンヨンを見つけるなり、近寄ってくる。

彼は、可愛いものには、目がないのだ。

さつそく、なでなではじめる。

「でも、今日は、遊んであげられないんだ」

「わかってるよーん、がんばってよーん」

「うん、がんばってくるよ」

最初の方は、オールドビスも本探しを手伝っていた。

だが、いつの間にか、手伝いもせず、図書館の片隅でヨンヨンと遊び始めた。

「オールドビスは、最初からあてにしてないわ」

そんな様子を見て、シルルは言う。

……酷い言われようである。

「ところで……海と湖について、思うことがあるの」
シルルは、湖賊の少年に語りかける。
少年は、軽い気持ちで、その話を聞くことにした。

「なぜ、ひとつの島、ひとつの湖というこんな形になったのか、それは、古い文献、伝承という形でしか残っていないなくて、謎が多いの」
シルルは、海について語りだした。

「水は「身（生命）」を繋げる」もの、海は命を『産み』だす場所。
そんな「海」と言う言葉は、大きな水『大水』おほみからきているとされているの。

でも、そもそも、湖も、たくさん水をたたえているから……」

海も、湖も、実は、同じなのではないかと言うことを、なんだか難しく回りくどく言っている。

それにしても、まさか、文献探しのお手伝いをしに来ただけなのに、こんな意外な事が待っていたとは思ってもしなかった。

（ああ、そうか、だから……）

シルルと長く付き合っているオルドビスの事だ、こうなる事は分かっていたはずだ。

さつさと、逃げ出した気持ちが、今、分かった。

だから、彼は、ヨンヨンのところに遊びに行ってしまったのだろ
う……

「もう一つ、『海』を語るうえで忘れてはいけないのは、海境ウナサカという地のこと。それは、海の果てと言う意味らしいのだけれど、『禁断の地』として伝わっています。この世界には、海が存在しないのに、『海の果て』の名称が伝わっているのも、おかしな話ね。
ウナサカ……幻の地、神聖な失われた地。禁断であり、伝説であり、

幻の地。今は無き『ウナサカ』にあるものとは……勇者とか、選ばれし者ならば、嫌でもそのような場所に行くことになるのでしょうか、けれど、現実と、夢物語は違うのは、分かっています。しかし、ウナサカは、ロマンあふれます」

シルルは、湖にはない『ウナサカ』の地に思いをはせている。もはや、ひとり別の世界にいるようだ。

ふと、少年は、辺りを見渡す。

少し離れた所にいたはずのオルドビスとヨンヨンが、先ほどから静かなのだ。

いるはずの方を見てみると、オルドビスは、机に伏せていた。

ヨンヨンもその傍らで、寝息をたてている。

いつの間にか、二人とも眠っていたのだ。

シルルの言葉には、眠気の魔法がかかっているのだろうか。

(何か、対策を練らないと、いよいよやばいな……)

湖賊の少年にも、例外ではなく、睡魔は襲い掛かっているのだ。

「ところで、神話や伝説をただの作り話だと思っていませんか？ これらの話は、代々残せるように、工夫されたものなの。神話や伝説が似ているのは、太古の昔に「何か」が起きたことを暗示している……」

適当に相槌をうつっている少年を気にもとめず、シルルは話し続けている。

「これは確かなんだけど、昔、海があったという痕跡はあるので

す。ただ忽然と消えたとしか思えないの。伝説として、分かっていることは、かつて、一度世界が死んだということだけ。破壊神クロフルオロカーボンの手によって、天に穴が開き、世界に破滅の光が降り注いで……」

あまりに話が長いので、湖賊の少年は、ついに、うとうとしはじめる……

「その時に、神が、隔離された世界を新たに創作し、少しの人々と少しの動物たちがこの地へ移り住んだの。新しく作った世界は小さいので、海が作れず、そのため、この小さな世界で生きることを決めたとき、海を失ってしまい……」

もはや誰も聞いている者はいないのであった。

しかし、延々、シルルの講義は、まだ続いている。

うとうとと、まどろむ、昏下がり。

湖賊の少年は……夢を見た。

それは、悪夢。

「歴史の見る悪夢。……永遠に繰り返す夢」

それは、歴史の記憶、大地の歴史……

海の伝説、ウナサカの謎の話。

あんな神話のような話を聞きながら、うとうとと、夢つつつになれば、

それに引きずられた夢にならない方がおかしい。

「記憶の見る悪夢。……永遠に失う夢」

もう意識は、もうすっかり夢の中だ。

もう誰の声も、聞こえないはずの、夢の中。

しかし、やはり、声が聞こえてくる。

「大地の見る悪夢。……永遠に滅びの夢」

聞こえてくる言葉は、何か呪文のように、いちいち悪夢を伝えてくる。

もやもやした、夢の空気。夢の重さ。夢の中の重力。

それは、まどろみの束縛の中にある。

「……悪夢の傷跡は、母なるウナサカに消えた」

目の前に、誰がいる。

「しかし、ウナサカの記憶は、いまだ深く見えない……」

自分に向かって、語りかける、誰かがいる。

「閉ざされた宇宙は、開かれた夢を見る。夢は変化を求め、旅路の行きつく先を知る……」

それは、見覚えのある……人物。のはずだ。

「求めるんだ、外の世界を、海を、ウナサカを」

ぼんやりする意識を、どこかで、これは夢の中であると感じている、そう分かっている意識の中、その人物を、認識しようとする。

確か、どこかで、会っている。

そつだ、あれは、間違いない。しゅりるりだ。
見間違いようがない。

しかし、なぜか逆さまだ。逆さまに浮いている。
浮いていると言うよりも天に足をつけ、逆さまに、立っている。
……重力に逆らっていると言う感じではなく、違和感がない。
もしかしたら、自分がさかさまなのかもしれない。

「気がついたかい……何でも屋さん？」逆さまのまま、言った。
「それにしても、なんで、さかさま？ふふふ」
しゅりるりは、空中で、くるくる回って微笑んでいる。

「おっとと、気を抜くと、すぐ回っちゃう」
回転していても、目だけは、合っている。
目にはやけている。

……絶対にわざと回っているに違いない。

「そつちが、逆さまなんだよー！」
ついついつつこんでしまう。

自分は、地面に足をちゃんとつけている。自分は、さかさまではない。
い。あつちがさかさまだ。

「自分から見れば、君は、逆さま。君から見れば、自分が逆さま。
お互い、逆になるのは、真実だね」
しゅりるりは言う。

もう、どうでもいいよ、この「逆さか」、「逆さではないか」の、
やりとり。

「だいたい、何、勝手に、人の夢の中に入ってきているんだよ」
「そうか、ここは、君の夢か……」

しゅりるりは、くるりと、地に足をつける。

「なんで、ここにいるんだよ？」

「なぜ、ここにいてるかって？ん、『ここ』は、どこにでも干渉して、どこにも干渉しないから、

……ああ、過ごしやすいからかな。うん、これだ！暇つぶし 暇つぶし ふうふう

「暇つぶしって……」

相変わらず、謎しか残さない要領を得ない発言。

「まあ、どうしても良いでしょう、そんなことは それよりも、君の夢は、ずいぶんと、

世界の見る悪夢まで、近づいてしまったね」

「世界の見る悪夢？」

「世界と言っても、そんな大それたものではなくて、なんとというか、過去の残骸だね。

この『星』に移ろう者たちのユメ、キオク、ヤボウ。時々、現実の世界にちよっかい出すんだよ。

とにかくね、この夢から覚めるには、この助けを求めている夢を救うことをしなくてはいけない。

つまり、この夢に巣食う悪夢の大元、破壊神『クロロフルオロカーボン』を倒さないといけないんだよ」

なんだか、変な夢になりつつある。

(まあ、夢だから、付き合ってもいいか)

「はいはい、わかりました」

「ノリ悪いなあ、なんだか、つれないなあ……この、無味無臭人間め！」

「？」

「味気のない人間ってことだよ」

「……はあ」

このしゅりりの変なテンションには、正直ついていけない少年な
のでした。

「と、に、か、く……はじめようか。それじゃあ、まずは、これ！
しゅりりが、指を鳴らし合図すると、全ての色が、失われた。
正確には、失われたわけではない。

古い写真のように、古い記憶のように、色が色あせていく。
薄い褐色の色に置き換わっていく背景。

「な、なんだ、この色は！」

「雰囲気づくり、そういう風に見える魔法、だよ」
さすが、夢。何でもありだな。

「向こうから、文字がやってくるよ」
しゅりりが指を指す。

ああ、さっそく、何か、文字がやってきたよ。

” 時と共に消え、刻と共に絶え、今はもう無い海 ”

” 海と湖 ”

” 似て非なるもの ”

” 海、この世界に存在しない水の集合体 ”

” 湖、水でできた海 ”

” この世界に、なぜ海は存在しないのか ”

” 存在しなくなったのか ”

” 太古、何があったのかを知ること ”

”引き継がれることなく失われたこと”

”約束の地『ウナサカ』”

”海の『ウナサカ』”

「……………」

（ああ、これが、噂のオープニングのスクロールメッセージと言うヤツなのか…………）

いやいやいや、それは、ないだろう、さすがに。

納得しかけたが、少年は我にかえる。

「いくら、何でもありませんからって、これはないと思うよ」
しかし、文字は、お構い無しに、次から次にやってくる。

（最後まで、待つしかないのかな…………）
多少、あきらめた。

”伝説の悪魔『クロロフルオロカーボン』が、大気に穴を開け”

”悪魔の発する光『きんがいせん紫外線』が降り注ぐ…………”

”そして、世界は滅んだ…………”

”融ける大地に、あふれる海”

”死んだ土、死んだ空”

”外世界からの破壊の光に滅ぶ世界…………”

”ひとつの尊い文明が消滅した”

”逃れた人々は、作り出した小さな世界へ移る”

”少しの生物達は、小さな箱の中”

”母なる海を失い、父なる大地を失い、人は、箱の中で、ウナサカを夢見る……”

”しかし、世界の再生のときは、近い……”

そして、文字は、どこか上の方へ消えていった。

「いわゆる、時は満ちたから、どうのこうのってやつだよ」

文字を見送りながら、しゅりるりは、見も蓋もないことを言う。

そして、突然、くるりと方向転換。湖賊の少年の方を見る。

「さあ、今こそ、旅立つのだ、若者よ」

おおげさに、両手を挙げた。

「……しゅりさんは、手伝ってくれないの？」

しゅりるりは、片目をつぶり、人差し指を左右に振った。

「『君が』選ばれたんだ。神の気まぐれ、神の手のひら、暇つぶしに。」

自分は、ただ、それを見ている傍観者。それしか許されていない存在

しゅりるりは、ただ、神の手のひらに転がされる人々を見て、楽しむつもりなのです。

「まあ、でも、こつそり、手伝うくらいは大丈夫かな。ただ観察みしているだけは、暇だし……
ばれなきゃ、いいんだよ。こついうのは」

しゅりるりは、1歩、歩き出す。

「そうだ……」と言い、「うふふ」と笑う。

「勇者よ！これを与えよう！受け取るが良い！」

しゅりるりが、再び合図すると、銅の金具が美しい宝箱がふたつ足元に現れた。

片手で持てるくらいの小さなサイズである。

「片方が、ほんの少しのお金。もう片方が、木の棒だよ」
箱を開ける前に、中身をばらしてしまう。

「……それは、役に立つの？」「さあ？」

とにかく……

こつして、二人は旅立つことにしたのです。

「……どこへ？」「さあ？」

ふたりに、最初の試練、最初の難関が立ちはだかるのでした。

「勇者が現れる前に、散々破壊と殺戮を続けてきた魔王が、死ぬんだ。」

それを、まだ、人間たちも、魔王の手下たちも知らないしゅりるりは、突然言い出した。

「それは、ゲームとしては成り立たないよ……」

それにしても、どこへ向かえばいいのか、さっぱりわからない。

「しゅりさんは、よくここにいるんでしょ？本当に知らないの？」

「はっはっは。自慢じゃないけれど、なあんにも知らないよ。自分は基本的に見ているだけで、

干渉しないからね。……多少、ちよっかいは出すけれど」
ちよっと、どころか、かなり出しているような気がするが。

「ほつたらかしも、かわいそうだから、ヒントあげようか？」

これは一応、君の夢なんだから、君が念じれば、行けると思う。破壊神ところへも、どこへでも」

何も知らないんじゃないのか……と言う突っ込みは、心の片隅に置いておく。

「……そういうものの？簡単にいくの？」

「だって、これは夢だもの。何でもありなの」

「そう言われてもなあ……」

夢とは分かっているても、常識と言う壁が、突拍子もないこの現実に対応できず、想像を阻む。

「そっだ、この木の棒で、進むほうを決めよう」

宝箱に入っていた棒を、地面に立て、倒す。

棒は、森の方を指している。

「あの森の向こうにきつと、破壊神の家があるよ。絶対に」

「いい加減だなあ……」

しかし、言われるまま、森の方角へ進むしかない。

森の木々は空を完全に覆い隠すことは無く、それほど広くもないようだ。
いたって普通で、土の道もなんとなく整備されている。
散歩するにならば、良い森かもしれない。

「空箱つて、使い道ないよねえ……………」
道中、しゅりりりは、開いたままの2個の箱を、宙に投げては、受け取っている。
箱の動きは不規則で、よくもまあ、不安定な形のを、器用に操れるものだと思つた湖族の少年は思う。

「おつ、いいところに……………」
突然しゅりりりは、空箱を、勢いよく草むらに投げつける。
何か、鈍い音がして、そして、空箱がなぜか、爆発する。
煙の合間から、魔物が、吹っ飛んでいくのが見えた。

「君も、気をつけるんだよ。物陰に隠れて、襲う機会を狙っている魔物が、いるから」
しゅりりりがある限り、魔物に気がつかないことはないように思えるのだが……………」

「さて……………もう片方は、どうやって、使おうかな……………」
しゅりりりは、残った空箱を、片手でくるくる回している。いたづらつこのような笑みを浮かべて。

「……………あれ？殺気までたくさんいた魔物、いなくなっちゃったなあ。つまらないなあ」
待ち伏せが効かず、そして爆発する箱の恐怖に、魔物は逃げ出してしまったのだろうか。
その箱がある限り、魔物は襲つてこない……………そう思えてしまう。

「多分、もう、役に立ってるじゃん、その空箱……」
もはや、何を通つ込んだら良いのか分からなくなっていた。
「あはは こうしている間に、もうすぐ、森を抜けるね」

きつと、頭のどこかで、そう、思い浮かべてしまったのかもしれない。

イメージどおりの神殿が、木々の合間から見えてきた。

（ああ、これは、やっぱり、本当に僕の夢なんだなあ）少年は思う。

「道を示されれば、道は現れる さすが、夢だね。さ、入ろう。きつと、破壊神さまがお待ちかねだ」

神殿の中はいたって簡素で、5本の白亜色に輝く柱が円形に並んでいた。

その中央に巨大な硝子の結晶が浮かんでおり、その中で黒い物が眠っていた。

「あれの黒いもやもやが破壊神クロロフルオロカーボンだよ。さ、行こう」

しゅりるりは、言う。

二人が硝子の結晶の前に立つと、影は、朱色の眼を開いた。

「ここは、過去の遺産、過去の記憶、過去の過ちの収集所……囚われることの無い異邦者よ去れ」

硝子の向こうで、ふたつの瞳が見つめている。

「……返事は？」しゅりるりは、小声で促す。

「……え……」

本音は立ち去りたいのだが、多分、それはしゅりるりが許さないだろう。

「……た、立ち去りません……」
仕方なくそう返事する。

「悪夢を目の前にして、それでも、進むというのか……」
破壊神は、硝子の中で、笑んだように見えた。

「巡る廻る長い記憶……過去を紡ぐ夢、現在を創る者、未来を行く望……長い長い数多の悪夢……」
切れない思惑、切ない思い。しかし、終焉の民は未だ箱の中……」
そう、破壊神はつぶやくと、硝子が震える。黒い靄が立ち上る。
それは、容れているモノの中から、自らを脱する言葉。

天を蝕む破壊神クロロフルオロカーボン。
大地を侵す悪魔が人々の悪夢の力を得て、実体を持ち、具現化していく、だんだん形を創る。

「我が名は、破壊神クロロフルオロカーボン。異邦者よ、覚悟するが良い」

破壊神がそう名乗ったのが合図だった。
空気に緊張が走る。今ここに、戦いが始まったのだ。

「海に映る羊を数え、世界は、黎明の見る夢。それは逢魔が時の幻……それは狂々回る歯車の終焉歌」

破壊神は、呪文を唱え、片手を挙げる。

湿気を含んだ生暖かく重たい風が吹きつけてきた。澱んだ黒い空は、獣の嗥の嗥い声をあげる。

何が起ころのか、脳に写る暇もなく、漆黒の塊が、全てを覆った。
飲み込まれる世界。

全てを奪う悪夢。それは全てを飲み込む。

そこは、もう、破壊神の得意とする空間、歪んだ世界。

闇の光でできた神の手から、いくつかの闇が放たれる。

湖族の少年は、それをなんとか避ける。

触れていないはずなのに、皮膚がひりひりと、焼けるような軽い感覚を感じた。

闇の着弾したその場所。

そこには、何も残らない空間。変色している何も無い混沌。

破壊神の攻撃は、途絶えない。

雷光が、空を駆け抜ける。

時を刻む振動が重々しく、鋭く胸に響き突き刺さるよう。

湖族の少年は、その重苦しさに耐え切れず、地面に伏せる。

しゅりるりは、破壊神の繰り出す魔法を受けても、平然としている。それどころか、傷一つついていない。

「どうして、しゅりさんは、平気なの？」

「……干渉しないから、干渉されないんだよ」

そう言っている間にも、破壊神の繰り出す魔法が直撃している。

あたった時の爆発や爆風がその魔法の強力さを表している……はずなのだが。

しかし、何の反動もしゅりるりは感じていないようで、本当に、何も感じていないのだろうか、

当たった瞬間には、瞬きさえもしていない。

風になびきやすそうなマントでさえも、ピクリとも反応しないのだ。

しゅりるりは、湖族の少年の耳元でささやく。

「それに……（これは、夢だから）」「……そつと、ささやく。」

「（夢は幻影。幻の魔法……）これは、単なる独り言」

そつだ、これは、夢だった。すつかり忘れていた。

そう知ってしまったと、全くではないが、ほとんど痛さも恐怖も感じないような気がする。

アヤカシが飛び交う濁った川、枯れた花畑、現れる赤い炎。

溶ける大地、動かない生物、揺れて澱む大気。

これらは、幻。単なる恐ろしい夢。

「思い込みつて、こわいよね」

しかし、そうと分かったところで、どうしたらよいのか分からない。そういえば、対抗できそうな道具を何一つ持っていなかったのだ。

「困っているようだね これを使うんだ！」

少年の心を察したのか、しゅりるりは、何かを投げる。少年の前に、キラリと転がった。

それは、硬貨。あの宝箱に入っていたものだ。

「……何に使うんだよ……」

少年は、ため息混じりにつぶやいた。

「ふっふふ、何を隠そうその硬貨は、神殺しの英雄の血と骨から造られているから、

神という属性を持つモノには、『効果』抜群なんだよ。『高価』な『硬貨』だけにね」

……なんて都合が良い設定。取って付けたようなご都合主義的な……

…寒いギャグの……。

「さつきから、この硬貨の使い道ずっと考えていたんだけど、これで無事に解決」
しゅりるりは、とても満足しているようだった。

「でも、考えてみれば、夢の世界で、お金なんて必要なかったよね」
「ならなんで、硬貨を宝箱に入れたんだよ……」
「宝箱の中身には、少しのお金と、木の棒を入れておけば間違いないと、大昔の王様が言っていたの」
「どこの王様だよ、それ。」

よくわからないが、少年は散らばる硬貨を拾い握り締めた。しかし、少年の動きがそこで止まる。

「……どうやって、使っただよ……」
普通硬貨は、戦闘の武器としては使わない。

「ん〜 掲げてみたり、投げてみたり……あとは、口にくわえてみたり？」
まあ、それくらいしか、使い道ないよね……

「どうにでもなれ！」
少年は、小さな硬貨を破壊神に力いっぱい投げた。弧を描き硬貨は、破壊神の元へ煌く。
硬貨が、いくつもの眩い光の矢となり、破壊神に突き刺さる。

光の矢が刺さった破壊神は、もう攻撃する気はないようだ、動こうとしない。
穢れたモノを浄化するように、矢が刺さったところから、白い煙を

上げ、破壊神は小さくなっていく。

「……悪夢の中のひとつの希望……」
最期の言葉を発し、破壊神は安らかに消えていく。

それと同時に、世界が揺らぎ始めた。

目が覚めていく、夢が終わるような、そんな白くとけゆく世界。

「もうそろそろ、お別れだね」

しゅりるりは、言った。

「悪夢は倒しても、完全には消えない。これは、何回も攻略されるゲームのようなもの。」

再び、はじめに戻って、悪夢は復活してしまう。でも……」

しゅりるりの姿もついに風景に溶けはじめ。

「……でも、君は、一時の安息をこの夢に与えてくれた」

しかし、微かに残る感謝の気持ち、救われた夢の記憶だけが、確かにそこにはあった。

「ありがとう……」

……少年は目を覚ました。

図書館の薄暗く変化のない空間、静寂の反響する閉ざされた気配、古い本の匂いで満たされる空気。

ここは、小さな管理された記憶が集まる世界……

妙な気分が、感覚が、完全な覚醒を妨げている。

「変な夢を見てしまった……」

視界の端では、シルルの演説が、まだ続いていた。

魚の日記「ほろぼすの？ ゆめみてゆらゆら」

むかし うみがあつたらしいよーん

もし それがほんとうなら うみ みたいよーん

みずうみと うみは やっぱり ちがうものらしいよーん

おとがして しおとか ミネラルのあじがして

ああ むかしのひとはずるいよーん

むかしに 「なにか」があつて

うみが なくなつたらしいけれど

ながいはなしに ねむくなりましたよーん

ゆらゆらゆれて さまよう かいそうに なつたゆめ みたよーん
うみのうえには すばらしい なみがあつて もっとゆらゆら
られていたいよーん

いっしょにいた にんげんのおかたは なみのうえで ゆらゆらし
すぎて くらくらしていたよーん

おいら くらくらするのは いやだよーん

おいらは もともと さかなだから みずが ゆらゆらしても
いきだよーん

おいら さかなに うまれて よかつたよーん

うみ うみ うみ うみ

あこがれたよーん

10・海を求めて、見る夢に。(後書き)

クロロフルオロカーボンは、フロンガスのこと。
オゾン層に穴を開けます。

オゾンがなくなると、大半の生物にとって、有害な光、紫外線（U
V-C）が地上に降り注ぎます。

封印された「クロロフルオロカーボン（フロンガス）」が、
星を覆う聖なる守り「オゾン」の層に穴を開け、
破壊の光「紫外線（紫外線）」が地に降り注ぎ……
世界がー！！！！

という、ゲームを作ったら、きつとこんな話になるに違いありません。

……と言う話？

呪文のような名前と、天に穴を開ける能力と、なんて恐ろしい魔物、
魔王、破壊神なのでしょう！

文学作品で、紫外線を紫外線と書くことがあることを知りました。
確かにVioletは、スミレ色のことですからね……
で、使いたくなかったです。無駄に。

クロロフルオロカーボン（フロンガス）はオゾン層を破壊します。
オゾンは、酸素分子3つでできています。

オゾンは、酸素原子でできているし、紫外線を吸収するという、良
いイメージがありますが、一定以上吸ってはいけないのです。肺を
悪くしますよ。

（ちなみに、オゾンは活性酸素の仲間。酸素よりも酸化作用が強い

から、危険。注意！)

普通の酸素でも、高濃度の中に長時間いると、死ねます。本来酸素は、生物にとって、毒なのです。

しかし、酸化のストレスにさらされると言う代償を払ってでも、生物の多くは、酸素と言う毒を使って、エネルギーを創ることを選びました。

酸素によって得るエネルギー生産は、すばらしかったのです。

酸素……短時間、低濃度なら、良い効果もあると思うんだけど、最近流行りのオゾン空気清浄機とか、どうなんだろう？

オゾンには、たしかに、殺菌・殺ウイルス・脱臭効果があり、新型インフルエンザウイルスに効果があるかもしれないと、広告などは、そううたっています。

しかし空気清浄機だからといって、近くで深呼吸を「たくさん」してはいけません。

先ほども行ったとおり、オゾンは結構、毒なのです。

あとがきでも、雑学でもなくなってしまうたような気がします。ここまでは、読んでくださって、ありがとうございます。

11・1・ゆきだるま中（前書き）

合言葉は、「たまふさよんよん」（意味不明）

前回は、少しまじめだったので（そうかしら？）、今回はほのぼの系な日常を。

ほのぼのまったり日常のーコマだ！

11-1・ゆきだるま中

島と湖に訪れる短い季節、冬。

数年に1度しか訪れない白い精霊に、子供たちは喜び、白銀の世界を一日中駆け回る。

甲板には、船員とか、船に乗ってくる子供たちが作った雪だるまがいくつかある。

様々な大きさの、色々な顔の雪だるまが、たたずんでいる。

魚であるヨンヨンは、寒いのが嫌いなのだが、空からやってくる白い形の結晶には、興味津々で、
暖かな船内の、霜が溶けて滴り落ちる窓辺から、外を眺めて、そこを離れようとしない。

「外にある雪だるま、動いたような気がするよーん」

ヨンヨンはそれが、気になって仕方なくなってしまう。

寒いのは嫌いだけれど、好奇心のほうに優るそんな湖魚のヨンヨン。

「外に出たいよーん、ドア開けてよーん」

この船の船長である少年に、頼み外へ出る。

凍てつく、痛みを感じる風が肌を刺す。

「さ、さむいよーん」

「部屋に戻るかい？」

「だいじょうぶだよーん」

「あまり、無理はしないでね」

少年は、ドアの前で、ヨンヨンを見守ることにした。

「……そういえば、ヨンヨンは、雪は初めてか……いや、生まれた

ばかりの頃、1度体験しているか。
きつと、覚えていないだろうけれど……」
白い息を吐きながら、少年はそう思った。
そう言う少年も、雪は3、4回くらいしか見たことがない。それほど冷えこむことは稀なのである。

数年に1度、空に浮かぶ太陽の光が弱り、本来なら、雨として降りてくるはずの水滴が、
氷の結晶となって地上に降ってくると、聞いたことがある。
大人たちは、太陽を修理するために、神様が光と熱を弱めるからだ
と、冗談交じりに、
話してくれたっけ。

「修理」という言葉に、モイの最下層に住んでいる復元屋のアラクをなぜか思い出す。
もしも、あの太陽がこのまま弱り、光を失うことがあったら、アラクは復元できるのだろうか。
そう脳裏に浮かんできた。

「……なんとなくできてしまうような気がする」
それほど、彼は、神秘的で不思議な気配を感じる人物なのだ。

ヨンヨンは、雪かきですつかり雪のなくなった甲板を進み、動いたと思われる雪だるまの前に立つ。
それは、おかしな形をした白い雪だるまだった。

「よーん」

「……」

ヨンヨンは、雪だるまに呼びかけてみたが、雪だるまは、何の返事もしない。

普通の雪だるまだった。

「……う？」

ヨンヨンは首をかしげる。

「……よーん？」

今、雪だるまが、何か、しゃべったような気がする。

ヨンヨンは、雪だるまに体当たりをして、雪だるまを倒し、壊してみる。

「よーん!？」

ヨンヨンは、驚く。誰かが、雪だるまの中にいた!

中から、2匹の白狐、玉殿と房殿が転がり出てきたのだ。

2匹は、変な布の服を着ている。

「も、もっと、や、やさしく、こ、壊して欲しかったです……」

「で、ですう」

「だ、大丈夫かよーん？」

「と、凍死するんじゃないかと、し、心配は、む、無用ですう!」

「こ、この服は、い、家に代々伝わる、さ、寒さに強い素晴らしい、ふ、服なのですう」

あんまり寒くないから、ずっと、じっとしていたら、雪だるまになっってしまったらしい。

ほのかにカタカタ震えている2匹の白狐。

「……温かい、お風呂に入るかい？」

事の成り行きを、ずっと見ていた湖族の少年は、凍える3匹を船室に連れて行くのでした。

魚の日記「ゆきだるま?」

「どんなに じょうずに かくれても

さむさで あんよが しもやけよーん 「

ゆきは ようせいの はねの きらきらした

はばたきから うまねると おいらは おもつよーん

さむいゆきのついで ころころきんぎよは

あかくそまって がらすのよつだよーん

かちかちだよーん

おゆ かけたら とけるか?よーん

よ よーん……

おそろしい そうぞうしちゃったよーん

> i i 2 5 0 6 | 3 1 2 <

11-1・ゆきだるま中（後書き）

雪。冬。

大好きな季節です。

自分の故郷は東北なのですが、冬、列車に乗るときは、気をつけな
いといけない事があります。

開閉ボタンのある列車は良いのですが、半自動のドアになるものが
あります。

半自動ドア。駅に着いても、数センチしか自動では開かず、あとは、
手でドアを開けて外に出るタイプの列車です。

田舎の路線は、誰も降りない時もあるので、無駄に寒い空気を入れ
ないための工夫です。

ちなみに、他に降りる人がいなかったら、ドアを、閉めるのがちょ
っとした優しさです。

11・2・亀の折紙。それは、オリガメ！（前書き）

合言葉は、「たまふさよんよん・ぱーと2」（意味不明）

前回の続きのような、そうでもないような。

どろどろという事は無い、単なるほのぼの系日常の話。

11-2・亀の折紙。それは、オリガメ！

船に歌が響く。

それは、湖魚ヨンヨンの歌うお風呂の歌。

「おふーろー 熱くない様に、湯をかきまわーすよーん」

もちろん、一応魚であるヨンヨンは、温かいお風呂には入れない。だから、実際にお風呂に入っているのは、二匹の白狐、玉殿と房殿。ヨンヨンは、二匹の狐が温かいお風呂に入っている間、ただ待っているのも暇なので、近くに置いてあった洗面器の中にいて、歌っているのだ。

「おふーろー 熱いお湯は、こまりまっすよーん
おふーろー 浸かれば、おいしいだしー 疲れが、とれーるよーん
」

歌をよく聞いてみると、本来の歌詞から遠く、だいぶ適当な歌詞になっっているようだ。

「熱ーいだしですう」
「とれーるですう」

玉殿と房殿の合いの手も入り、さらににぎやかだ。

「おふーろー おふーろー よーん
ひろーい、おふーろー よーん
せまーい、おふーろー よーん、よーん」

「おふろですう」
「よーんですう」

「そろそろあがるですう」

ヨンヨンの歌も一段落したところで、玉殿と房殿は、湯船からあがる。

「温かかったですう」

「気持ちよかったですう」

白狐の玉殿と房殿は、お風呂に入ってほっかほか。

「お風呂上りには、あれですう」

「一杯やるですう」

ビンに入った飲み物をぐいっと、一気に飲む。

「ほら、ちゃんと拭かないと」

湖族の少年は、体もよく拭かないうちに、部屋の中をはしゃぎまわる白狐たちに、
半ば呆れながらも言う。

「湯冷めしないうちに、今日は、もう家にお帰り」

「今日は、楽しかったですう」

「ヨンヨンちゃんに、これあげるですう」

それは、折り紙でできた緑色の亀（多少の防水仕様）だった。

「友達の印ですう」

「うれしいよーん」

「また来るですう」

「ですう」

魚の日記「おりがめ」

おふるは あついから さますよーん

おいらが あついおゆに はいると きっと だしが とれるよーん

でも あついから はいりたくないよーん
おゆではなくて やっぱり みずが いちばん だよーん

おりがめは かめだけれど およげないよーん > i 2 7 3 2 | 3 1

2 <

だって おりがめは かみ だからよーん

だから につきちよーの きよーのペーじに
たいせつに はさんでおいたよーん

11-2・亀の折紙。それは、オリガメ！（後書き）

日本は紙の文化。

自慢になってしまおうのですが、自分は、1cmの紙で折鶴が折れません。

8mmだと、ぎりぎり？5mmだと、途中までしか折れません。ちよつとだけ、手先が器用なのです。

折り紙は、外国の人に手軽に見せることができ、喜んでもらえるような日本の文化のひとつだと思います。

12・吹雪の夜に

「酷い嵐がきそうだ」

まだ、風も波も穏やかだが、風が嵐の気配をはらんでいた。

今日は、雪も舞っている。このままでは、酷い吹雪になるだろう。

「この調子だと……」

少年船長は、船にいる誰よりも、風の流れ、水の流れを視ることができた。

突然変わる大気の流れ、気まぐれで吹く強風、危険な水の流れ……誰よりも早く変化に気が付き、正確に、指示を出すことができた。そついった湖の上において発揮される能力のおかげで、船員たちの信頼も厚い。

だから、船長という役職についているのだ。

「早めに避難するに越したことはないか……」

湖の上で嵐が過ぎるまで、漂躑うもつひしても良いのだが、

こういう酷く荒れそうな時は、無理をして湖の上にいる必要は無いのだ。

陸に上げれるのならば、陸に避難する。

それが、長生きするため代々受け継がれてきた船乗りの知識なのだ。

湖のほとりにには、船ごと入れる船倉庫がある。

普段は使われることもなく、めったに人も寄り付かない場所ではあるのだが、

こういう時のために避難したり、船体を修理したりする場所なのだ。

「なんとか、間に合ったかな」

嵐が本格的になる前に、船倉庫がある場所につくことができた。

この嵐がおさまるまでは、ここにいろしかない。

「みんな、嵐がおさまるまで、各自、好きな部屋で休んでその船倉庫には、いくつか休める部屋があるのだ。」

「船長、部屋にひとつ明かりが、だれかいろようです」

船員の一人が、指差した先、数ある部屋のうち一つ、明かりがついている。

先客がいろようだ。

「きつと、嵐で非難してきたんじゃないかな」

急な嵐だったので、陸を旅していた人が避難してきたのだろう。

「ボクが様子を見に行ってみるよ」

「おいらもついて行くよーん」

湖族の少年とヨンヨンは、戸を叩き、中へ入ってみる。

そこには、数人の少年、少女、白狐がいろ。

「なんだか、こんな嵐の日に、こんな離れた場所に、勢ぞろいだね」

……」

2、3人かと思っていたのに、意外な人の多さに少年は少し驚いろ。

そして、ご丁寧に、一人倒れている人もいろ。

遭難した物語にありがちな状況だ。

一体、どんな推理モノの話なんだと、少年は思いろ。

「あら、何でも屋さん 夢であつた以来だね」

新たな来客に気がついたらしゅりるりが言いろ。

(……：やっぱり、夢の中にいろたのか！)

それはさておき、少年は経緯を尋ねる。

「どうして、テースキラさんは倒れているの？」

そう、倒れているのは……：テースキラだった。

倒れているテースキラの上で、雛の子が、ひよひよないている……

「一応、応急処置はしたんだけどね……」
しゅりるりは、うつむき震えながら言う。

「何をしても動かないのですう」

「きつと、しんでいるのですう」

玉殿と房殿は言う。

「こわいですう」「ですう」

シルルの後ろに隠れて震える白狐たち。

「そ、そうなのかよーん。おいらも、怖くなってきたよーん」
湖族の少年に抱えられていた、ヨンヨンも震えだす。

シルルと、オールドビスの話では、急な嵐で、家に帰ろうとしていたはずが、道に迷って、
気がついたらこの家の近くに来ていたらしい。

「災難だったねえ」

しゅりるりは、楽しそうに言う。この笑顔は、なにか企んでいる時の顔だ。

笑顔のまま、一枚の変色した紙を取り出す。

「部屋を調べているとき、このダイニングメッセージを見つけたんだ」

「ダイニングメッセージじゃなくて？」

「間違えてはないよ、ダイニング、つまり台所」

そう言って、しゅりるりは、もう一枚、古い紙を取り出す。

「テーブルの上には、この『夕ご飯は冷蔵庫の中』と言う紙が、冷蔵庫の扉には、この『おやつは戸棚』という書き込みが」

2枚の紙がしゅりるりの手の中でひらひら踊っている。

「確かに、それは、台所の伝言だね……」

この事件とは、全く何の関係もなさそうだ。

「ふっふっふ、犯人は この中にいる！」

しゅりるりは、突然、生き生きと語りだす。

どこから取り出したのか、茶色の帽子と外套着込んでいた。

どこかの本で読んだような格好だ。

一体、何をしたいというのだろう。

「この中にいるんですう？」

「犯人は誰ですう？」

白狐たちは、探偵の出現に、大はしゃぎである。

「ふっふっふ、まあまあ、落ち着きなさい。玉殿ちゃんに房殿ちゃん」

しゅりるりは、二匹の白狐をなだめる。

「テースキラを死なせてしまったのは誰ですう？」

「誰がテースキラを殺したですう」

しゅりるりは、ニヤニヤしながら、まだ、黙っている。

「そろそろ、だから……」

テースキラに視線をやる。何かを待っているようだ。

「計算が正しければ、そろそろ、起動する頃……」

しゅりるりのことだ、何か突拍子も無い畏を……

……と、その時。

「……まだ生きている。少し深く寝ていただけ、」

突然、今まで、何の反応も示さなかったテースキラが、無表情で、のそりと起き上がる。

「おぼけですう」

「きゃーですう」

「よーん、よーん」

「いや、いや、いや、さつきまで、息してなかったよ」

玉殿と房殿とヨンヨンに混じって、オールドビスもおびえている。

「だから、一応、応急処置はしたって、言ったでしょう 応急処置の結果、

生き返らなかったとは一言も言っていないよ。まあ、大丈夫とも言っていないけれどね」

しゅりるりは、再びうつむきながら震えだす。

笑いをこらえているようだ。

(さっきの、あれも、笑いをこらえていたのだろうなあ……)

湖族の少年は、思い出し、苦笑いする。

何か企んでいるとは思ったが、やはり……しゅりるりが楽しそうにしていた理由がやっと分かった。

誤解を与えて、楽しんでいたのだ。

何一つ、嘘はついておらず、事実しかしゃべっていないから、たちが悪い。

なんだか、しゅりるりに嵌められた気分だ。

「……犯人は、しゅりるりだったというオチ？」

オールドビスは、そっとつぶやいた。

まあ、確かに、この騒ぎの原因は間違いなくしゅりるりだろう。

「……でも」

シルルが口を挟む。

「でも……呼吸なかったし、肌も、ものすごく白かったというか、

生気がなくて、駄目だったのかと」

彼女は、いつものように冷静に対応する。

「まあ、細かいことは気にしないの」

「どうして、息してなかったよーん？」

恐れより、好奇心が勝ったヨンヨンは、テースキラに尋ねる。

「呼吸？ボクには、その行為は、必要ないんだ。そういう構造、
そういう体質らしい。」

おおよそ、生物の常識とは離れた身体をしているらしい。

「……おや？ここは、どこだ？思っていた場所と違う、」

まだ、状況を把握していないテースキラ。

「そろそろ、起きる頃だと思ったよ 君が倒れていたから、タイヘンダ〜と思ってね」

しゅりるりは、棒読みで言う。絶対「大変」とは、思っていなかったに違いない。

「ここまで運んできたんだけど、嵐に巻き込まれてね。嵐が来る前には、アラクのところへ運びたかつたんだけどね」
しゅりるりの笑みは、まだ消えていない。

「し、師匠？来ていたんですか？ココに、」

テースキラの赤い瞳が、瞬く。

「まあね、ココで一休みしていたら、人がそろそろやってきてさ
しゅりるりは「うふふ」と笑う。

「……知っててやっていたでしょ……師匠は、」

「さあ、何の話かなあ」

しゅりるりは、さらに唇をあげる。

面白そうだとあらば、どこからでも、いつでも、なんでも現れるの

だ。そういう人なのだ。

「師匠……?」

テースキラがしゅりるりに向けているこの言葉が気になった。

「師匠と呼ばれているものの、テースキラは弟子って言うわけではないのさ。あだ名みたいなものかな」

しゅりるりは、丁寧に答えてくれた。

しかし、だからといって、この状況の謎が解けるわけではなく、重要な情報ではないのも事実。

「しかし、師匠のお手を煩わせるなんて。別にそのまま放置していても、構わなかったのに、」

テースキラは、一応感謝はしているようだ。

「あのままだったら、本当に、動かなくなっていたよ?」

「仮に、あのまま本当に動かなくなっても、代わりの芽は、たくさんいるからね、その程度じゃ、何てことない、」

相変わらず表情一つ変えず、無表情のままだ。

「君は、本当にたくさん目の持っているよね。確認したから分かると思うけれど……」

ちよつと、あちこち、色々影響が出ているみたいだね。まあ、いつものことだしね。緊急度は低いよ」

「あと数刻で嵐は収まるかな。予備が、故障部分を修理したようだし、」

「テースキラは、やっぱり、便利だね。離れていても、見えるんだから」

二人は、なにやら、次元の違う話をしている。

「ああ、そうそう、あくまで、応急処置しただけだからね、ちゃんとアラクのところに行くんだよ、テースキラ」

「ああ、自分の体のことは、わかっているつもり、」

テースキラの無感情な表情からは読み取れないが、予想以上に、ボロボロらしい。

「これからが本番。いずれ……いや、もうすでに『時』が来た……つかまつってしまったから、」

「……もうすぐ、だね」

「人々は選ばなくてはいけない。海を求めるのか、」

「君も、彼も、やっと眠れる日が来たんだね……」

二人にしか分からない会話は進んでいく。

空想科学とか、幻想世界とか、夢物語に出てくるような会話に、戸惑いを隠せない。

「一体何の話をしているの」

「簡単に言うと、この嵐の原因究明と研究かな……テースキラは、調べているというか、見ているんだよ。」

「どこでなぜ嵐が生まれたのか」

「師匠も、知っているくせに。……これだから、師匠は、」

テースキラは、あくまで傍観主義のしゅりりに呆れている。

「……そして、その説明中に、テースキラは怪我をして倒れてしまった。」

それを見つけたから、嵐が本格的になる前に、アラクのところへ、運ぼうとしたけれど、

間に合わなかったと言う、ただそれだけの話」

会話と、現実がつかない。

何かなにやらさっぱりな、少年なのでした。

「まあ、とにかく、嵐もじき収まるし、この事件は、被害者が死んでいなかった、

……ということ、無事解決 おしまい、ってということ」

しゅりりのその言葉によって、強制的に幕が閉じ、話は終わってしまっただ。

なんだか、そんな感じでしたとさ。
「めでたし、めでたし」

魚の日記「迷・たんでー」

じっさいの たんでいは さっじんじけんは かいけつできないよ
ーん

それは けいさつのしごとだよーん
たんでいが じけんは まきこまれても けいさつに ちゃんと
れんらくしてよーん

「はんにんは おつまえだよーん」
でも いつてみたい ひとことだよーん

> i 2 9 6 6 | 3 1 2 <

12・吹雪の夜に（後書き）

意味不明系な話は、何が起こっても、なんとなく許されるよね。そんな感覚があります。

一言「おしまい」といえば、どんなに混沌でも、なにか大事な謎が残っても、終わるのです。

この終わり方のように唐突でも……（？）

関係ない話。

もしも、全小説の登場キャラクター人気投票やったら、上位に、ヨンヨンは入ると思う。

むしろ、他の作品の登場人物たちを抑えて、ダントツの1位？（笑）

……一応主人公だもんね、ヨンヨンは。

ちなみに、作者はヨンヨンが一番好きかという点、実はそうではないのが、面白いところ。

5本の指には入っているけれどね。

13-1・霧の生まれる森（前書き）

今回から、少しSF風。

SFって、大風呂敷を開きすぎて、収集がつかなくなりやすい。色々捨てては、復活し……

ああ、でも、まだ、広げた風呂敷は広いかもしれない。

でも、捨つぞ。最終回までには、風呂敷の中身を。ちゃんと。

湖の周り、つまり島の湖岸を1周するのに必要な時間は、充分な睡眠時間や休憩時間も含めても、徒歩で30日もかかからない。

帆船や乗用動物といった乗り物を使えば、疲れずにもっと早く移動することができる。

大抵の村人は村の近くで漁をするための小舟を持っているが、あえて舟で湖1周する奇人は、あまりいない。

手漕ぎの小舟は、下手をすると、徒歩よりもかかってしまうのだ。だから、1周とまでいかなくても、舟で対岸へ行くことも稀でなのである。

それに舟で渡ろうとすると、巨大な怪物の縄張りに入ってしまう、襲われてしまうことがあるのだ。

(……という、噂があるが、実際に、襲われたと言う事実は今まで一切ない)

噂によると、怪物は帆船の船長が飼っているという噂もある。

村人たちが湖を自分たちの舟で渡ると、船賃が稼げなくなるから怪物を使って、

自分の船以外、渡れなくしているのだと。

しかし、実際のところ、この怪物の正体は、現実に存在する生物ではなくて、

湖の真っ只中で力尽きて遭難しないため、無理してはいけないと、無謀な行為を諫めるモノ（主に好奇心と探検心に満ちた子供たちに向けて）というのを、みんな知っている。

そして、ほとんどの場合、舟で対岸まで、漕ぐのが疲れるし、帆船を使えば、一番離れている対岸でも、1日もあれば、どんなに遅くても着いてしまう。

安全安心に、そして楽に、湖を渡るために、この世界に住んでいる人間は、
風で帆走^{はしる}る帆船を使っているのだ。

今日も、湖岸に狼煙が上がっている。

狼煙は、湖に浮かぶ船を呼ぶためのものなのだ。

「船長！のろしが上がっています」

見張りの船員が、見張り台から報告する。

「分かった！今から、そこへ向かおう」

少年船長は、指示を出す。

「方角は……モイだね」

モイ地下街の船着場に長身の人が立っている。それは、復元屋のアラクだった。

「アラクさん、めずらしいですね」

「ああ、たまには、ね」

眼の下にクマを携え、相変わらず眠そうな眼が、空を見上げている。

「まだ、ちょっと、太陽がご機嫌ななめで、寒い日が続いているな」

「そうですね、毎日こう寒いと、朝起きるのが大変で」

そう、今年の冬は例年に比べると少し長かった。

もうそろそろ、温かくなっても言い頃なのに。

「しかし、もう少しで、太陽は復活して、温かくなるだろう」

「本当に、春が待ち遠しいですよね」

まさか、アラクが、天気の話をしてくるとは思わなかった。

こういう、ありきたりな会話はしなさそうな雰囲気を持ち主だから。

「それはそうと、向こうへ」

雑談もそこに、アラクは、行き先を指差した。

指差された先には、確か……

「霧の森？」

「そう、そこまで、お願いできるかな」

霧の森と言ったら、テースキラの住んでいる場所だ。

「テースキラさんに、会いに行くのですか？」

アラクとテースキラは、友人だということを少年は思い出した。

「まあ、そうだな」

「テースキラさんの所に……いや、霧の森に、僕もついて行って良いですか？」

霧の森は、何も無いといわれているが、謎多きこの世界の未開の地。そこへ行くと言うので、好奇心が沸き起こったのだ。

「……ああ、構わない。あんまり、他人に見せるような場所ではないけれど……」

霧の森は、いつも白い霧に包まれている。

夏は緑の草原の中に、冬は茶色の大地の中に、いつ、どこから見ても、

白い霞がかかっているのが分かるくらいに。

「来る頃だと思ったよ。そろそろ、」

森の手前の湖岸で、テースキラは、立っていた。

テースキラは、アラクがくることを分かっていたようだ。

「テースキラさん、おひさしぶりです」

森の近くの岸に船を着ける。

「迷惑をかけたね。この前は、」

子供特有の高い声が、唇から漏れる。

「こけー、こけー、くるっぱー、」とテースキラの頭の上の雛子こひこも、挨拶代わりに歌う。

だいぶ成長したようだが、相変わらずどこか違和感のある雛である。

「さあ、そろそろ行こうか、ボクから、あまり離れないで。霧に惑

わされるから、」

テースキラは、先頭に立ち、森へ向かう。

本来ならば、森の霧は深く、手を伸ばしたくらいの狭い範囲しか見えない。

だから、方向を見失い、ひどく迷う森なのだ。

しかし、テースキラの進む道は、霧が周りを避けていくかのように、先が見える。

「この森は、ボクが認めたものしか、真実の姿を見せない偽りの森、

」

数刻ほど歩いただろうか、少し開けた場所に来た。そこに、数本の1本の大木がある。

そのうちのひとつの樹の根元に、分かりにくいのが、扉のようなものがある。

「樹に擬態させた建物なんだよ、仮に人がこの近くを通っても、気がつかないような、」

テースキラは言う。

「霧にここから遠ざけるような幻も含まれているから、この近くに来ることは、ほぼ不可能なのだが、

念には念を、と言っわけだ」

アラクが付け加える。

テースキラは、樹の幹に作られた扉に手をかける。

「この中は……危険と判断したら、戻ってもらおうよ。けっこう、命がけ、」

開かれた扉の向こうは、暗く、階段が地下深く続いている。薄暗く、なんか出そうな雰囲気。

壁から白いもや、有り得ない声、蒟蒻（！）のぶら下がる。

そう、まるで、そう化け物屋敷の入り口のようなのである。

ここでは、何が出てもおかしくないような気がした。

そんなことはないと思いつながらも中へ入る。

少し長い階段の最終地点は扉であった。

テースキラは、扉の右側にあるボタンを押した。

すると、扉は自動的に開く。

扉の先は、拍子抜けするくらい、少し小さな行き止まりの部屋。

「中へどうぞ、」

アラクは、何も言わず、当たり前のように中へ入った。

「何でも屋さんもどうぞ。さあ、」

テースキラは、さらに促した。

「……この小さな部屋で何をするのだろうか……」

戸惑いながらも、湖族の少年は、その部屋に入った。

この部屋の床はやたらと音が響いた。

「不思議な部屋だなあ……」

まるで、床の下に何も無い空間があるかのように靴が床に当たると、びじ、

奇妙な響きを奏でるのだ。

二人が中にはいるのを確認すると、最後にテースキラが中へ入る。

「準備は良い？閉めるよ、」

壁に設置されたボタンを押すと、扉が閉まった。

これから何が起こるといえるのだろうか。

扉が完全に閉まると、箱が、揺れた。

「わわ」

なんか揺れている。

いや、揺れるとは違う奇妙な感覚。

「なんだ？なんだ？」

うまく表現はできないが、何か、体の中が「ぬわん」とする、そんな不思議な感覚。

何が起きているのか、さっぱり分からない。

「実は、この部屋ごと別のところへ移動している。これは、古代の遺産、古代の技術」

アラクは、突然語りだす。

「古代の？」

「そう、君が生まれるずっと、ずっと、前。火と雷の魔法を使えた

時代の事」

世界にまだ海があり、ほぼひとつの文明で統一されていた……
今はもう伝説となってしまった時代の。

「魔法を利用して、光の中を情報が飛び交い、ただの金属が人を乗せて空を飛び……」

「金属が？空を飛ぶ？」

木でできたしゃもじが飛ぶんだから、金属が飛ぶこともありえなくもないのかなと、

思いつつも、やはり信じられなかった。

「金属は硬く重いモノ……だが、しかし、昔は、その金属に頼っていたのです」

「でも、空を飛ぶ道具を作ったのはすごい」

丈夫な布でできた強大な風船を使えば、空の散歩を楽しむことはできなくはないが、

金属で、しかも魔法を使って、空を飛ぶことができるのならば、それはすごいことである。

「……しかし、滅びてしまいました。その技術は、刻とともに消え、刻とともに絶え、

知るものは、人の中にはもういない」

そう、もう、誰も、知らないのだ。知っているのは、それこそ「神のみ」ぞ。

「……本来、世界は、自らの力で常に復元されていきました。しかし、度を越えた破壊は、

どんなにがんばっても、元のように復元できないのです。

気の遠くなるほど長い時間がかかります。そして、どんなに時間をかけても、

昔のように、再び実用に耐えうるものになるのかどうかも分からない……」

アラクは、そのまま黙ってしまった。

箱の奇妙な揺れは、まだ止まらなかった。

魚の日記「みずうみのかいぶつ」

みずうみのかいぶつは こわいよーん

でも おいら みずうみで およいでいても

おおきなかいぶつ みたことないよーん

おいらが いったことのない

ずっと ずっと ふかいところに いるのかよーん？

おいらが している みずうみの ふかいところは

みずが うまれてくる おおきないわが たくさん あるよーん

ひかりも とどかない やみのなかでも きらきらしていて きれ

いだよーん

それが おそろしい かいぶつのしょうたい？

あれって じつは うごいたりするのかよーん

だとしたら おいら こわいよーん

> i 3 2 1 5 | 3 1 2 <

13 - 1・霧の生まれる森（後書き）

光学迷彩（霧の）、エレベーター、飛行機、光通信……
なんだか、SF色の13 - 1話。

……このぶかぶか編の世界で、もし飛行機飛ばしたら……
というのか、飛行機を飛ばせるほど広くない！と思う！
せいぜい、気球！

「でも おいらは しゃもじで そらを とびたいよーん」

ちなみに、現実世界で研究されている光学迷彩は、特殊な加工をした物を使って、

物体の背後の映像を外部から投影させたり、光を反射せず後方へ迂回させたりして、

実現すれば、あたかも物体が透明になったかのように見えるらしい。

長い沈黙に耐えられなかった湖族の少年は、口を開く。

「それにしても、ここは、不思議なところですね。どこもかしこも、……まるで箱の中みたい……」

建物の中なのだから、あたりまえなんだけれど。

「君は、詩人のような感性の持ち主だな」

アラクは言う。

「ありがとう……」

少年は、なぜか照れくさくなり微笑んでしまう。

「到着するよ、そろそろ、」テースキラがそう告げる。

箱の揺れが止まり、自動的に、扉が開いた。

扉の外から、ひんやりした空気が流れ込んでくる。

ここは、少し寒い。

そこは、蜘蛛でさえ死に絶えた……まるで、白骨死体の1つや2つ、発掘できそうなくらい、

生きている者などいないような、生気を感じない、何も無い無機質の廊下だった。

それに、この冷えた空気は、なんだか薄いように感じた。

「ここは？一体、何なんですか？」

「ここは、外と中の境界……世界の境界、」

テースキラは、説明する。

「そして……だから、ココをウナサカと呼んでいるんだよ」
その説明を、別のところからの声が、遮った。

「でたな、神出鬼没」アラクは言う。

しゅりるりが、そこにはいた。

しかも、天井を歩いている。

「アラク、久しぶり。何年ぶりかな？相変わらず、忙しそうだね」

「なぜ、ここに現れた？」

「そろそろだと思って、見届けにきたんだよ」

「やはりな……君には、テースキラとは、異なった『眼』がある……何か面白そうなのがあると知れば、どこからともなくこの世界に沸いてくる」

「あはは、酷い言いよう 人を、虫か何かのように」

しゅりるりは、天井を蹴って、宙でぐるりと回ると、床へ足をつけた。

「うん、こっちの方が、話しやすいね」

「しゅりさん？一体どこから？なぜ、天井を？」なんか、どこかで見たような既視感。

「……だから、神出鬼没と言うんだ」

ため息混じりに、アラクは言う。

「中と外の境界線であるこのウナサカは、上と下も、あやふやなんだよ」

「だからといって、わざわざ、天井を歩いてこなくても。これだから、師匠は、いつも、自由すぎる、」

「ウナサカに来るのは久しぶりだから、迷っちゃったよ。床と天井の区別がつかないほどに」

「……嘘だな……」アラクは、ぼそりと言う。

この3人は、古くからの馴染みなのだろう。言葉の端々に、馴れ合

いを感じた。

ここは、ウナサカという名前の空間。

ウナサカ。海の果てにある海の境。海の界まかいと書いて、海界《ウナサカ》。

「ここは、ウナサカって言うって、言っていたけれど、どうして、そんな名前を？」

「遠い昔に……海を失った時、未来の夢を託して、ここは名付けられた。

海の果てにある幻の世界に思いを寄せて。新しい……世界を見つけ、その領域に、捕まるまで、」

「領域つて、相変わらず、難しい良い回しするねえ、テースキラはしゅりるりは、「うふふっ」と笑う。

「勘の良い、君の事だから、うすうす気がついていいるとは思っけれど、

この世界は実は作られた世界なんだよ。星の海を旅するために、何千年も前に。」

「……星の海を旅する？」

突然の告白に、予想を上回る事実じじつに、これ以上の言葉が出ない。

「君は、この世界の形を知っているかな？」

しゅりるりは、どこからとも無く、模造紙を取り出し、壁に貼り、図解する。

紙に書かれていたのは四重の円。

「この世界は、四重構造になっているんだ」

そう言うと、一番外側の層を指差した。

「一番外の第一外郭は、石の殻。天然モノの小惑星の自然の岩肌」

次に、球体の中心を指す。

「その天体の中身をくりぬいて、中心に作ったのが君たちの住む世界だよ。」

水と土と風と光を入れた小さな世界」

中心部は、カラフルな色で、湖と島と風と太陽が表現されていた。その絵は、ごちゃごちゃしているように見えるが、意外なことに、分かりやすかった。

「そして、この第二外郭は、力作だよ」

第二外郭は、第一外郭に密着する形で、存在している。

「ありとあらゆる耐衝撃・耐熱性金属物質でコーティングしたからその金属が、いかに素晴らしいかを、力説する。」

『外』からの衝撃……たとえば、隕石がぶつかっても、一番外の岩の外郭が少し剥がれ落ちるだけで、そんなに深い穴は開かないらしい。

「だから、第一外郭は、隕石の落ちた衝撃で、円形の窪地だらけなんだけれど、

第二外郭に守られているから、君たちの世界は、全く影響が無いんだよ。すごいよね」

「へえ……」

専門的な用語、説明に、なんとなくしか、理解できなかったが、すごいものだと言うことだけは、
感じる事ができた。

「最後に、ここ。この第二外郭と君たちの住む世界の間は……秘密で満たされているんだよ。」

君たちの世界の大気を循環させたり、水を生み出したり、光となる太陽を管理したり……

中だけではなく、外から来る影響から守るための仕掛けがたくさん……

そう、今、君がいるのがここ。この小惑星の船を制御、管理している場所ウナサカ」

「じゃあ、僕は今、本当に、世界の中と外の間にいるんですね……」
小さな星の中に創られた小さな世界に住む少年は今、秘密を知ったのだ。

「このウナサカは、とても重要な場所。こまめに点検、修理しないといけない。

大部分はそれで事足りるんだけど、復元と補強修理は違うから……アラクに任せないと、

どうしても、だめなところがある。どうしても修理では、対応できない処が、」

テースキラが補足の説明をする。

「アラクさんにしか直せない場所？」

「今回、私は、君たちが太陽と呼んでいる光源の復元をする」
アラクが今回の目的を話す。

「とは言っても、空に浮かんでいるのは、点検が終わったんだ。でも、もっと根っこ、

ウナサカにある調光室とか動力源とかなんかそういうところが、色々あって、やられちゃったんだって」

「どこからそういう情報を仕入れてくるのか……師匠は、本当に、なんでも知っている。

今、太陽は予備で動かしている状態。アラクの復元がそれが終われ

ば、太陽の光は強くなり、春が訪れる、」

「太陽の修理の時に冬が来るって、本当だったんだ……」
言い伝えだと思っていた物語が、実際の事だと知り、少年は驚きを隠せず、なんとも言えない表情になる。

「時代を経るごとに、事実を知るものがいなくなり、話だけ形となつて残ってしまったのだろう」

「僕が、ここで見たことを、みんなに言っても、信じてもらえなさそうだ……」

あまりにも、壮大で、突拍子も無い真実は、知った今でも、信じられない。

「ははは、大丈夫。もう少しで、皆、信じざるを得ない状況になるから。しかも、もっとすごいことを、ね」

まだ、何か秘密があると言うのだろうか。この場所、この世界には。

「しゅり、そこまでだ。これは、まだ伝えられない。あの希望の扉を開く……その時まで」

アラクは、さらに話し続けようとするしゅりるりを制する。

「はい」

しゅりるりは、それに素直に従った。

「でも、なんだかんだ言つて、ここの秘密を話したいんだよ、ボク等は、」

「何も知らない人が、真実を知った時の顔が、素敵だからね」

「……私は、あまり、共感できないのだが……」

(しかし、もうすぐではあるけれど、まだ……自分の一存で、これ以上の秘密を、『彼ら』に管理された小さな世界の秘密を見せるわけには行かないな)

世界の構造についての講義はそこそこに、4人はなんとなく廊下を歩き出す。

「この先は、行かないほうがいい」

「……そうか、これは君たちの体には有害なモノだったな。失念していた。もうしわけない、」

「ボクたちが、これから向かうところは、『外』に近くなる。何でも屋さんは、そこまで、行かないほうがいい。

生身の人間では、あの環境は過酷過ぎる、」

「……分かりました。おとなしく、待っています」
この先も行きたい好奇心は強いものの、ここは従ったほうが良いだろう。

「あなたたちは？大丈夫なんですか？」
素朴な疑問が思い浮かぶ。

「もともと、ここはボクの住処、」

「私は、自分自身を常に復元している。だから、多くのことは平気なんだ」

「無敵だから、大丈夫」

3人は即答する。

やはり、この3人は人ならざる者なのだ。

「現場には、行くことができないけれど、ここでただ待っているものつまらないでしょ？」

しゅりるりは、何やらテースキラに耳打ちをする。

「あそこは、待つ場所として、丁度良いね。いいよ、案内する、」
暇を潰せる良い部屋があるらしい。

少し進んだところにあつた分かれ道で、アラクとしゅりるりと別れた。

「なんで、君は、私についてくるのだ」

「より面白そうな方に行く。そういう奴って言うのを、アラクもよく知っているでしょ？」

そう言う会話が、遠ざかっていく。

テースキラに案内されたその部屋は、薄暗い青の空間であつた。

「ここは、湖を管理している部屋、湖の底。地上からの煌きが、水の中を泳ぐモノたちが、水の循環が……」

また違った世界の美しさが見えるだろう。君たちが、いつも見ている風景と、」

壁も天井も、湾曲したガラスのようなもので出来ており、巨大な水槽のようであつた。

「これが、湖の底……」

「向こうからは、こちらは見えないうつになつている。なるべく周囲の風景に溶け込むように、」

目立たぬように単なる岩の湖底に似せて、造つてあるから、」

泳ぐ魚たちの群、水の揺らめき、湖面から降り注ぐ雪のようなモノ
……
生命にあふれた美しい湖の中。

「そういえば、ヨンヨンが昔、湖の底にキラキラした水の故郷見つけたと、言っていたっけ……」
それがもしかしたら、ココだったのかもしれないと。

魚の日記「はこのなかのせかい」
せかいの ひみつを しまってしまったらしいよーん
むずかしいことは おいらには わからないけれど
このせかいは おおきなはこのなかに あるらしいよーん

はこのおそとには うみがあつて
だから はこをあけたら うみがあるよーん
でも そのうみは ほしのうみらしいよーん

はこは ほしのうみに うかんで たびしてるよーん
はこは じつは ふねなんだよーん
それじゃあ はこのそとにでたら うみ あるのかよーん？

おいら おそとに いきたいけれど どうやら そこは きけんらしいよーん
ざんねんだよーん

> i 3 2 5 2 | 3 1 2 <

13 - 2 ・ あかつきの湖（後書き）

小さな世界の構造の話。多分、もはや、これは、SFです。どんだん、どんだん、風呂敷は大きく広がっていきます。大風呂敷です。

物語中盤から終盤にありがちな、展開模様？

小惑星をくりぬいて、それを巨大宇宙船にする。

地上に広い建設場所が必要なくて、便利だね……

資材とか運ぶのが大変そうだけれど、

スペースシャトル組み立てていくような感じで、運べばできそう。

それに、すでに宇宙にあるので、打ち上げる必要も無い。

旅立つ時も、地上から打ち上げるよりも、燃料が少なく済みそう。

ちょっとロマン（？）あふれるよくある話

14・「0の扉」を開く時

「太陽の修理、ちゃんと終わったみたいだね……」

太陽は、暖かな日差しを注ぎ、風は、暖かな空気を世界の隅々まで、運んでいる。

鳥は歌い、虫は舞う、草木が芽吹く季節、春。

船は2本の帆檣ほふしゅうが、空に向かってたつており天を支えている。

そんな時、霧の森から、狼煙があがる。

霧の森で狼煙を上げるのは、一人しかない。

少年は、心躍った。

また何か、この世界の秘密の匂いがするのだ。

「こんにちは、テースキラさん」

「外の世界に思いを馳せているようだね。最近、船に乗り込んできての第一声。」

心の中を見透かしたように、テースキラは言う。

「未知の世界を知ってしまったので……どうしても湖族の少年は照れ気味に言う。」

「その、好奇心が人間を進化させてきたんだ、テースキラの赤い瞳が微笑んだ。」

「今日はどうしたんですか？」

「とうとう、時が来たんだ、」

「時が？」少年は、疑問に思う。

「そう、希望の扉を、開く時がきた、」

「希望の扉……」

その単語は、聞き覚えのあった。

そういえば、この前ウナサカへ行った時、聞いた言葉だ。

「開くための準備を、今からする。準備は、万全にしないではいけないから、」

そう言うと、「ヤチボカ村まで、」と、短く言った。

「ヤチボカ村に、その扉があるんですか？」

「あの村にも、実は、秘密があるんだ。村の外れのご神木に、」

村はずれのご神木。

冠婚葬祭の時、夏の暑い日の憩いの場、人々に親しまれてきた樹。

「この樹に、重要なものが隠されているんだ。君たちの先祖が残した希望の、」

「残した？」

「そう、ボクらは、そのために生きていた。ずっと、」

「その……扉、はどうやって、開くのですか？」

ご神木の扉……樹に扉があると言う表現に、不思議な感覚を抱きつつ、湖族の少年は問う。

「大丈夫、一応、『鍵』も持ってきたから、」

テースキラは、1枚の半透明の厚紙を取り出した。そこには古い時代の文字で『海の舟』と書かれていた。

「その紙が鍵……？」

鍵というと、棒の先にギザギザがついていて……と言う普通のもの

を想像していたのだ。
この紙は、どうやって使うのだろう。

「それよりも、ご神木に扉があつたなんて知りませんでした」
単なる樹だと思つていたのだ。

外見は普通の木の皮、何の違和感も無い少し硬く、でも湿っている
生きた樹の表皮。

そして……扉らしきものは、どこにも無かつたように記憶している。

「正確には、これに扉はなく、ここには扉を開く機構、その他、色々
々な働きが詰まつた、
樹に擬態させた搭でしかない。扉は、一部の関係者しか、知らない
形、分からない場所。

立ち入れない者には、そこに何があるのか、中で何が行われている
のか、分からない。

不思議と未知と謎と浪漫のあふれている場所と、思う。しかし、そ
こは、一般の人には、
危険に満ちているし、何よりも関係の無いものの立ち入りは、仕事
に支障をきたす。

それは、君の船にもあるような、関係者立ち入り禁止の扉の向こう
側と似ている。

少し規模が違うだけ、」

「そう言うものなのかなあ」

確かに、その方法は合理的ではある。やりすぎているような気はす
るけれど。

テースキラは、ご神木の前に立つ。

そこは、やはり何の変哲も無い樹の幹。とても、何かがあるように
は思えない。

「さて、まだ、いきっていると良いな、この認証。じゃないと少し面倒、」

そして、テースキラは、樹に、手を触れた。

『認証、』

テースキラが、言葉を発すると、樹からうつすらと光が漏れ、模様を描き光り輝いた。

そして、厚紙でできた『鍵』で、その光の模様に触れると、「ピピ」と音がした。

「……今ので、開いたの？」

鍵というと、鍵穴に差し込んで回すというイメージしかなかった湖族の少年にとって、

厚紙が鍵で、それを光の模様にかざすという行為だけでも、奇妙。そして、それに反応したように音がすることには、驚嘆。

「開いたと言うか、なんとというか。第一の封印が解けたと言うか、どうやら、口での説明は、難しいようだ。」

「しかし、次の段階に移行するかどうかが、問題、」

ご神木の前で、しばらく待ってみたものの、何も起きなかった。

「……やっぱり、反応なし、」

予想していたのだろう、特にあわてた様子はなかった。

「仕方ない……」

テースキラは、樹に向かって、再び言葉を告げる。

『強制機能起動、緊急算譜入力、手動切り替え、』

樹が、枝が、ざざっと、さざめいた。

葉のざわめきの中、男とも、女とも分からない不思議な声が、響く。

『……緊急システム起動します。認証……』”*****”、検索
しています……承認しました。

システム作動します。……警告、エラーが発生しました、その算譜
は存在しないため、

操作を行えません。……不正な処理を行ったので、強制終了されま
す。……警告、

エラーが発生しました、切断できません、再試行します……警告、
エラーが、』

樹が、なにやら難しい呪文のような文言を言っている。

「……もはや、正常な処理や動作をしていない。ここは、完全に壊
れている、」

『強制切断、』

テースキラが、すると、声が『ブツッ』と、やむ。

「……打つ手、無しなんですか？」

何が起きているのか皆目見当のつかない少年は、おそるおそる尋ね
てみる。

「ココが、動かないのは、予想の範囲内、報告どおり、」
鍵をパタパタ揺らし、次なる手を考えているようだ。

「壊れているのは、ココの機構、ココの内部の……それならば、」
テースキラは、右手の袖をまくる。袖からは、白く細い手が現れる。
「何でも屋さんは、少し離れていて、」

湖族の少年が、離れたのを見ると、テースキラは、右手を高く上げ

た。

「この世界では、ボクの侵入を拒める機器は存在しない、」
そして、樹の幹に思いっきり拳を打ち付けた。

樹の破片が飛び散り、樹ではない金属の破片のようなモノも飛び散った。

衝撃を与えたその樹の内部から、稲妻が、数本テースキラの体を走る。

右腕は壁に、しっかりと突き刺さっている。

刺さっているというよりも、融合してしまっているといった方が、正確だろうか。

しばしの静寂のあと、白い煙が噴き出した。

その煙がテースキラの姿を覆い隠す。

「わ！一体、何が？」

何が行われているのだろう、ご神木が奇妙な悲鳴を上げているように、枝が揺れ、葉が波打つ。

煙が全てを覆っていて、何が起こっているのか、全く見えなかった。

彼は、無事なのだろうか。

「テ、テースキラさん？」

何が何だか、分からない少年は、駆け寄ろうとする。

「まだ、来てはいけない、」

しかし、テースキラは、制止する。

煙が収まりはじめ、何事も無い無表情な顔のテースキラの姿が見えてきた。

何事も無かったかのように、そこに立っていた。
しかし、何かがおかしかった。

「!!どうしたんですか?」

現れたテースキラの右手が無いのだ。無理やりちぎったかのように無くなっている。

「強制的に電子侵入して、壊れた算譜を正しく書き換え、なおかつ、壊れた機構の補修に、

右手の機構をそのまま代用、移植した。これで、昔のように、動くようになった、」

何をしていたのかを、無表情で答えた。

「いや、そうじゃなくて……右腕が、無くなって……」

テースキラは、右手を失ったことなど全く気にしていないようだ。

「右手?ああ、大丈夫。家に帰れば、いくらでも直せるから、」

「でも……その……痛くないんですか?」

その質問を、意外に感じたのだろうか。

テースキラは、呆気にとられたかのように、赤い目を瞬かせている。

「……ボクの体は、君たちと構造が違う、」

確かに、血は流れておらず、骨も肉も、変な形、色である。

血の変わりに、白い霧が、傷口から漏れている。

「……見て分かる通り、ボクは、正確には、『生物』ではない、
テースキラは、思い出すかのように目を細めた。

「それに、生まれた時……いや、この姿を貰う前から、人として扱われたことはあまり無い。

ボクは、霧。ボクは、瞳。霧の器に、眼があるだけ。それに、代わりは、たくさんいる、

……でも、気を使ってくれたことは、嬉しいよ。ありがとう。」
テースキラは、一瞬だったが、唇を少しあげた。
「いえ……どういたしまして」
少年は、テースキラの生物離れした体について、何を言ったら良いのか分からなくなってしまった。

「さて、そろそろ、湖に現れるよ、」
「湖に？なにが？」

突然の話題に、少年は状況が飲み込めず、きよとんとする。

「扉が、開いたからね、」
「え？……扉、開いていたんですか？」
「侵入ついでに、開けてきたんだ、」

もつと、こう、『ジュジュジュジュ……』と言うような、壮大な音、
過剰な演出……

そう言った驚きにあふれる『すごいこと』が起きるものと、思っていたので、拍子抜けしてしまった。

「侵入して開けることができるんだったら……鍵、必要ないじゃん
……」

「形式は、大切だよ、」
テースキラが、にやりと笑ったような気がした。

扉は既に開いているとテースキラは言ったが、今はまだ、特に何も変わった様子は無い。

己の右手と引き換えにしてまで、開かなくてはいけない扉。
その扉が開くと何が起きるのか……

「きた、」テースキラは、突然言う。

そういわれ、再び湖を見てみると、底の方で、巨大な影が揺れていた。

清んだ水の底から、何かが現れようとしている。

「あれは……一体？」

「浮かんでからの、お楽しみ、」

数刻後……

湖に浮かぶ物は、帆船だけではなかった。

帆船が何十隻も収納できるのではないかと言うほどの、巨大な帆の無い金属の船が浮かんでいた。

「……扉つて、湖の底にあったんですね」

湖底の扉が開き、この金属の船が浮上した、と湖族の少年は、そう理解した。

何も知らなければ、一体どういうことなのか理解に苦しんだろう。しかし、少年は、この世界の外側に存在する、ウナサカという空間を既に知っていた。

あの巨大な空間ならば、巨大な船の一つや二つ格納されていてもおかしくはない。

「それにしても、大きな、船……」

「これも昔に作られた遺産。外の世界を旅するための……ただ、外の世界を長く旅するには、小さすぎる船、」

「外の世界を……旅する？」

テースキラは、軽くうなずいた。

「君たちは、選択しなくてはいけない、」

テースキラは、鉄の船体に触れた。

「時が来たんだ、」

いままで、この時がくるまで、それは、湖の地下深くで眠っていたのだ。

「封じられた世界はもうすぐ開く。始まりの場所、そして、終わりの場所の、」

魚の日記「かみがみのいさん」

ごしんぼくは じつは ほんもののきじゃ なかったよーん

なんか かみなりが びびびって なっていたよーん

どうやら かみさまがつくった ふしぎなき だったみたいだよーん

ごしんぼくが びびびって なったら

とつぜん みずうみに てつのはこが あらわれたよーん

そのおおきなほこは じつは かみさまが つくった ふねらしいよーん

いままで みずうみのそこに あつたらしいけれど

あんなおおきなふね おいら みたことないよーん

いったい どこにあったのか おいら ふしぎでならないよーん

> i 3 4 1 2 | 3 1 2 <

14・「0の扉」を開く時（後書き）

樹は木ではなく、機でした……という話？

コンピューター、0と1で出来た世界。

0と1の組み合わせだけで、素晴らしい文章や、映像、音楽を奏でる。

時には、人が何百年もかかってしまうような計算を一瞬でしてしまう。

人間がモニターの前で、楽しんでいる間、プログラムはひたすら0と1を繰り返している。

延々、延々繰り返していく。

この世界を埋め尽くして0と1だけの最も単純で複雑な世界。

1秒間に、何億個もの0と1をやり取りできるって、すごいですよね……

自分は、もう、この1と0で覆われた世界が無ければ、生きていけないかもしれない。

15・「1の扉」が開く時

湖に、大きな金属の箱が浮いている。

「なんだろうアレ」

人々は、湖に浮かぶこの船を間近で見ようと、ヤチボカ村に集まってきた。

この世界の全てとも言える人たちが、この小さな村に。

「お、君も来ていたのか」

「そう言う君も、物好きだな」

「コレは、なんかわからないけれど、好奇心が沸かないわけが無いよ」

こういう変わった事件が起こることは、数少ないので、普段、外に出ない人まで、興味を抱き、事件の現場へ足を向けてしまう。

「うふふ、すごい人数、すごい人。この船が、浮かべば、ここに人が集まることは、予想通り」

しゅりるりは、ご神木の上の方の枝に座り、集まる見物客を楽しそうに見ている。

「それにしても、何でも屋さんは大変だね」

人々を乗せヤチボカ村まで運ぶ仕事で、大忙しだ。

「そろそろ、自分も、お手伝いするかな。テースキラや、アラクは、大勢の人前で話すのは、あまり得意ではなさそうだし」

しゅりるりは、鞆の中から、本を取り出す。

そして、1枚1枚ページを、めくっていく。まるで、読んでいないのかのような速さで。

「……確認終わり。もう、ばっちり、覚えている」

前々から準備していたこの日のための台本。それも読み終わり、しゅりるりは、一息つく。

「そろそろ、良い頃合いかな」

しゅりるりは、樹の上から、いつの間にか、鉄の船の甲板に、移動していた。

視線が、一気に集まる。

「やっぱり、人が多いなあ。声、後ろの方まで届くかな？」

声の大きさには、自信があったが、ここは野外。どうしても、声は拡散してしまいそうだ。

「こんなこともあるのかと……」

しゅりるりは、拡声器を取り出した。

声は遠くまで綺麗に届き、しかも、ハウリングの起きないすばらしいモノだ。

「時が来たんだ！」

第一声が、響き渡る。

「信じられないかもしれないけれど……」

しゅりるりは、島に住む人々一同を前に語りだす。

「この世界は、外から隔離された小さな空間に作られたんだ」
かつて、ある星が滅びの道を歩んだことを。

そして、その故郷の星を捨て、新たな星を見つけるために、移動式の世界を作ったこと……

それが、ここであるということ……

「この創られた世界の詳しい構造は省くけれど、この世界は、そういうこと……」

それは、代々語り継がれてきた物語。

月日が流れるほどに、夢物語と化していった伝説。

「あの言い伝えは本当だったのか」

湖に浮かぶ、船を見る限り、信じざるを得なかった。

自分たちの技術では、到底作ることができない金属の船。

人々に、ざわめきが起こる。

「そして、今、君たちの先祖が託した願いが叶う時が来たんだ。とうとう、見つけたんだよ。」

君たちが住むことができる水と空気にあふれる星を」

今、世界に起きていることを、起こそうとしていることを、しゅりるりは語る。

「それを、可能にするのが、この船。この造られた世界から、外へ行くための船」

海を捨て、故郷に残り、何も変わらない箱庭に住まうのか。

海を求めて、故郷を捨て、外の広大な世界へ行くのか。

この世界に住むすべての人の選択の時。

この小さな世界に別れを告げるかどうかの。

「それを選ぶのは、君たちなんだよ」

しゅりりりの長い長い昔話が、終わった。

人々は、しばらくの間、何も言わなかった。

「今すぐとは言わないから、ゆっくり考えてね」

そう言うと、しゅりりりは、甲板からゆっくりと姿を消した。

しゅりりりの姿が消えると、ぼつぼつと、話声が聞こえ始めた。

「私は外へ行こうかしら……おもしろそうだし。ね？」

「う、うん……い、行こうか」

「俺も行く!」

「僕も!」

「おいらも、行きたいよーん」

「行きたいですう」

「ですう」

「外の世界か、どんなところなんだろうな」

若者たちの多くは、もう既に、外の世界に思いをはせていた。

しかし、一方で、いまさら生活を変えられない人たちもいる。彼らは、箱の中の世界で果てると決める。

「私たちに構わず、未来ある子供たちは、いきなさい。外で」

「苦難の道かもしれない、でも、この閉ざされた世界では、物足りないのでしょうか？」

若いということは、そういうこと。狭い世界においては、駄目だ」

「さびしくなるわねえ……」

「みんなで、お別れの祭りでも開きましょうか。今までに無いくらい盛大に」

「そうそう、10日くらい、ぱーと、ぶっ続けに！」

「あなたは、お酒が飲みたいだけでしょうか？」

「はははは、違う」

人々は、和気洋々と宴の準備を始める。

「あはは、祭り、まつり、まつりが、始まるよ」

「師匠、はしやぎすぎ、」

「まったく、君は……邪魔をしないでくれるかな……」

金属の船の内部、アラクとテースキラは、最終の確認をしていた。

「お、これは、苗木だね」

他にも、様々な日用品が積まれている。

「あとは、乗り込む人に任せたら良いよ、何も、君たちが全部やってあげることはないんだから」

二人の手を引き、外へ連れ出そうとする。

「だから、二人とも、祭りに宴に、参加しなよ」

「……そうだな」

時に優しく、時に厳しい、母なる海を求める者たち。

見守る神管理者のいない世界へと旅立とうとする者たち。

「……彼らは、これから、自ら作り上げていく世界で生きなくてはならないのだから」

「この大地にこれから刻む記憶、この未来への役目も終えるのか……」
再生されたものと、元のもの。修正された、元のもの。

この小さな世界は、今、大きな選択をしたのだ。

魚の日記「そのせかい」

うみを かみさまが くださるらしいよーん

おおきな ふねに みんなと のれば

かみさまが うみに つれていってくれるらしいよーん

どきどき

なんか むずかしくて おいらには わからないけれど

うみは ここにはなくて おそとにあるらしいよーん

せかいのふたを ひらけば そこには うみが あるらしいよーん

わくわく

でも このまえは

おそとは きけんって いったいたような きがするよーん

やっぱり おいらには むずかしくて わからないよーん

15・「1の扉」が開く時（後書き）

時々、自分の小説の登場人物の名前を、ネットで検索して遊んでい
るんだけど、

それは、結構楽しく、息抜きになる……

アラク（アラックとも言う）

中近東を中心に、北アフリカ地方などでも伝統的につくられてきた
蒸留酒。

アラクそのものは無色透明だが、水で割ると白濁する。

…… 普段は透明で、水を加えると白くなる。 不思議なお酒ですねえ

…… アラクも、不思議な存在といえは、不思議？

16・箱と猫と観察者

新たな場所へと旅立つ者たちと、閉ざされた世界に残る人たちの別れの宴は、まだ行われていた。人々が集い旅の無事を祈っている。

「もう、遠い昔に……この星の船が出発する時も見えた光景だねえ」
しかし、あの時と違うのは、その涙が、悲しみや絶望、不安から来るものではなく、
希望と期待にあふれていることだ。

「この日が来るとは、な。ここまで、どれほどの時間が、経ったことか」

長かったというべきか、否か。
アラクは、カラント、氷の入った器を鳴らす。

「『セイメイ星を破壊する物質』、クロロフルオロカーボン悪魔たちの騒ぎは、
世界を覆う青い奇跡の大気を滅ぼした」

しゅりりりは、氷の入った飲み物を飲み干した。溶けて、小さくなりかけた氷も、
噛み砕き、コップは空になる。

「……それは、まるで儚い夢のよう、世界の見た悪夢のように、
テースキラは空を見上げた。

「閉ざされた空。偽りの太陽……管理された箱の中の世界、」
しかし、この閉ざされた世界でさえ、完全ではない。

「この狭い世界では、管理が必要だった。人は神にはなれない。この小さな世界でさえ、」

手からあふれる。ここは、世界を破り外へとつながる場所。箱の外に出ることによって、再び世界は壊れてしまうかもしれない。箱の中に唯一残された……未来と言う名の希望でさえ、失うかもしれない。」

テースキラは、意識が夢を見ているかのように、瞳には、目の前のものが映っていない。

「この世界が作られた目的のモノ、新たな星が見つかり、その方向への転換。

重力圏への安全な侵入と定着。それに伴う、この世界への負荷……駄目かと思った。

内部金属層の偏りを引き起こし、それに引きずられた世界が、システムに障害を与えた時は、」

緩やかに移動速度を落としつつ、目的の位置に停止する。

動いていたものを止める、その微妙な調整というのは、それほど、なかなか難しいものなのだ。

「何千年も、旅をしていれば、色々ガタもくるよ」

万物は、永遠ではない。

「人工太陽調光室破損、擬態させた監視システム数体の緊急停止、特定地域で重力システムの異常、数えたらきりが無い、」

「だから、冬は長引き、君の雛子は瀕死、しゃもじは飛んだ」

「……あの場所で、しゃもじを飛ばしたのは、君だろう？」

アラクは、かかさずつつこむ。

「そうだった？」

しゅりるりは、にやにやしている。絶対に覚えている顔だ。

「だけれど、内部金属層の偏りは、ここに残されている技術じゃ、もう、どうにもなら無いね」

この状態では、もう、星の海を自由に航行することはできない。

「でも、問題は無い。長い旅は、終わったのだから、」

……と、テースキラの赤い瞳が、くるくる輝く。

「おや……何でも屋さんとヨンヨンちゃんが、ここに来る。どうやら、もうすぐ、」

「相変わらず、眼は良いんだね」

テースキラの言うとおり、湖族の少年と、ヨンヨンがやってきた。

「こんなところにいたんですね」

小脇にヨンヨンを抱えて、少年はやってきた。

「おお、少年！ご機嫌いかが？ヨンヨンちゃんも、大きくなったね？久しぶりよ〜ん」

しゅりるりは、大げさに、出迎える。

「この前、会ったばかりだよーん」

「そうだった？おいら、忘れちゃったよーん」

「忘れちゃったのは、しかたないよーん」

「うん、忘れちゃったのは、しかたないよーん」

「よーん？」

「よーん」

「よんよんよーん？」

「よんよんよーん」

「おいらのマネしているよーん？」

「おいらのマネしているんだよんよん」
「ヨンヨンと、しゅりりは、いつまでも」よんよんよんよん「言い合っている。」

「あれ？しゅりさん……酔っている？」

「いつにも増して、くるくるとした煩わしさが半端ない。」

「いや、酒は全く入っていないはずだが？」

しゅりりが、先ほどから飲んでるのは、氷の入ったただの水。

「まあ、シラフでも、テンションがおかしいのは、いつものこと、」

「よんよんよんよんよんよん」

「よんよんよんよんよんよん」 ヨンヨンちゃんは、どうしてここに来たんだよん？」

しゅりりは、まだ、ヨンヨンの真似をやめていない。

「そつだよん、思い出したよん。おいら、聞きたいことあったから、ここに来たんだよん」

ヨンヨンは、ここに来た目的を思い出したのだ。

「みんなは、一体、何者だよん」

それは、ヨンヨンだけではなく、湖族の少年も気になっていたことだ。

何百、何千年も生きていたような表現、この世界を造り、管理している者たちの正体を。

「うふふ、ひ・み・つ、だよん」

しゅりりりの、元も子もない答え。

「教えてよん」

「嫌だよ」

「よーん」と言うのかと思いきや、言わないしゅりるりのフェイントに、ヨンヨンは頬を膨らます。

「おいら、実は、知っているよーん……本に書いてあったよーん」

「何が本に書いてあったのかな？ヨンヨンちゃん」

しゅりるりは、尋ねる。

「本には、神様が世界を作ったってかいてあったよーん。だから、神さまなのよーん？」

ヨンヨンは、さらに質問をする。

しゅりるりは、「ふふっ」とため息のような、笑い声のような息を
はく。

「残念。ここに……その本に書いてあるような『神』は、いないんだ」

「そう、残念だけれど、そんな畏れ多いモノじゃないよ、ボクたちは、」

テースキラは、ヨンヨンの頭をなでる。

「……神さまじゃないのかよーん」

その答えに、ヨンヨンは残念そうだ。

「でも、全てを知り、全てに存在し、無から有を創造できる者は確かに『いる』し、」

場合によっては、それは『神』と呼ばれたりしている。

その存在は、微かに感じることでしかできないけれど、でも確かに、いるよ」

しゅりるりは、『神』の存在を肯定する。

「よく分からないよーん」
ヨンヨンは、小さなひれをパタパタさせている。

「でも……ヨンヨンちゃんが思う『神さま』と言うのは、きっと、アラクやテースキラの事かな。

そっちの方が、よっぽど民衆好みの『神』だよ。世界を復元する神アラクに、世界を見守る神テースキラ……

存在を認知しがたい不確かな『全知全能の神』よりも、よっぽど格好いいよね」

しゅりるりは、アラクとテースキラの肩をたたく。

「しかし、そう言う君も人のことは言えないぞ。神出鬼没のしゅり」
「また、そのあだ名で呼ぶ」

「こいつはな、観察者なんだよ。どこにでもいる、単なる観察者……」

アラクは言う。

「観察者？」

少年は、聞き慣れない言葉に、首をかしげた。

「観察者、良い表現だね……特に『単なる』と言う所が、気に入った」

しゅりるりは、喜びを表すように音符を散らす。

「……そこが、気に入ったのか……らしいと言えば、らしいが」
アラクは、未だにしゅりるりのツボが、よくわからないでいる。

「ふふふ」

しゅりるりは、得意げに棒と紙を、どこからとも無く取り出した。
何か説明する前触れだ。

「観察者、その名の通り、観察する人のことだよ。ただ、観察する対象が、普通と違う」

しゅりるりは、これを広げて持っていて！とばかりに、アラクに紙

を押し付けた。

「世界はね、いくつもの次元と、ありとあらゆる時間軸が複雑に絡み合っていてきている。」

そして、普段は、他の結果の世界に干渉できないようになっていて。だから、大半の人は限られた部分、つまり一つの流れの世界にしか存在できず観察できない」

紙には、世界全体を表す丸と、分岐した先の結果と、観察者の動きとが、描いてあった。

「でも、自分は、人よりも、多くの場所に『存在』し『観察』し『知ることができる』。」

ありとあらゆる場所の結果の行き着く先を見ることができるとだ。

雑多に見える世界も、
結局『一つ』に集約されるから
しゅりるりは、そう答える。

「分かったような、分からないような……」

図にも、そのようなことが書いてあるのだが、完全に理解するにはいたらなかった。

「何も難しいことは無いよ。あくまで、今現在、ここにある結果を観察することができるだけ。」

すでに起きた結果に影響を与えるような過去への働きかけはすることが出来ないし、

未来に起こることなんかも、あくまで、経験則の予測、可能性の範囲でしかわからない」

「でも、それは、普通のことなんじゃ？」

誰も、過ぎてしまった過去に干渉できないし、誰も、やってくる未

来のことは分からない。
今、起きていることしか分からないということは、誰にでも当てはまることだ。

「そう、誰にでも当てはまること。だから、自分は、普通の人って言うこと」

「いやいやいや……」

しゅりりりの話が射ているようで、大きく外しているのか、自分の理解を超えているのか……

「……やっぱり、よく分かりません」

「おいらも、難しくて、ぜんぜん分からないよーん」

「ヨンヨンちゃんには、難しかったかな？でも、大丈夫！実は、自分もよく分かっている」

「……よーん？」

「まあ、分かっていたとしても、正解はいう気は無いけれどね。自分の正体を把握している人はどれくらいいるだろうか。しゅりりはそう思いながら。」

「うまく、はぐらかされてしまったな」

アラクは、やれやれとため息をつく。

「……きっと永遠に謎なんだろうね。師匠が『何者』であるかは、テースキラが、この話題について、わかりやすくまとめ、一応は解決したことになった。」

「それはそうと……あなたたちは、これからどうするんですか？」
湖族の少年は、3人の人ならざるものたちに問う。

「私は、ここに残り、最期の人が果てるまで、再び、誰も知らない世界の果てで、世界の復元をするよ」

『外』に出て行く者たちは、多分、彼に会うことはないだろう……

「ボクは、この星の一部。ここでしか生きられない偽りの身体。存在しない形。しかし、見ていよう。

君たちのいる星を、いつでも、」

さいごまで、難解な答えをありがとう、テースキラ。

「自分は、もともと、ココの住人ではないからね……でも、そのうち、暇つぶしに遊びに、行くかもね」

3人の中では、ナニモノにもとらわれず、自由気ままなしゅりり。一番会えず、そして、一番逢える人物だろう。

最後まで、よく分からない正体の人だ。

「君は、何物にも囚われず自由だから羨ましいよ」

「あはは、単なるさびしがり屋でお節介なだけだよ。それに、自由でどこでも行ける、と言っても、

何でもできるわけではなく、結構制約が多くて、滅び行く星に対して、見ていることしかできなかつたよ。

それは結局何もしてあげることができないのと一緒にだよ」

その言葉に、アラクは昔を思い出したようだ。

「……滅びの前に、幾度も、復元を試みた。しかし、みな的心にある海の記憶の具現化、

記憶による失った部分の補完。記憶による復元は限りなく元通りにできるが、

それはあくまで記憶の中にあつたもの、元のものとは少し異なる場

合がある」

アラクの表情が曇る。

「……限りなく、では、やはり駄目だったのだ。人々は、本物の海を求めた。母なる大海原を。」

広大な星の海の中に。新たな生命の循環を」

アラクは、湖族の少年を見つめる。

「これから、うみださなくてはならない。君たちの手で、本当の海を……世界を」

魚の日記「おわかれかい」

みんなで どんちゃん さわいで たのしかったよーん

さかばのおじさんに もらった おいらの こつぷは

おわかれの せんべつなんだってよーん

おじさんと おわかれするの かなしいよーん？

それから さんにんの かみさまに あったよーん

でも かみさまは じぶんのは かみではないと いる
よーん

おいらにとっては かみさまは やっぱり かみさまだよーん

16・箱と猫と観測者（後書き）

今回の雑学（？）は、正しく理解してみたい、自分の好きな科学哲学について。

シュレディンガーの猫。（確立解釈と観測問題）

箱の中に毒ガス発生装置と猫。

毒ガスは、ある条件を検出すると発生する。一時間後、どうなっているか。

（ある条件を検出する可能性は50%）

箱を開けるまでは、猫は生と死二つの状態が、状態が重なりあっている。

観測者は、箱を開けるまで自分がどちらの世界にいたのか知ることが出来ない。

そして、観測者が結果を認知した瞬間、どちらか一方の結果しか、観測者の世界には残らない。

さらに、「可能性の全体」を一人の人間が認識することはできない。

感覚では理解できるような気がするけれど、論理的な思考の元では、……じつは、何が言いたいのか、よく分かっていない、わけが分からなくなる。

「……やっぱり、さっぱり分からないよーん」

でも、だから、謎めいた存在、多元宇宙の箱の中の、猫と観測者というモノに、

憧れ、思いをはせるのかもしれない……

17・ウナサカ、海の果てへ。

……この湖唯一の船には、日々たくさんの人が訪れていた。

船の上で、魚を釣る人。

村と街を行き来する人。

湖賊に依頼をする人。

そして、この船が行くところ、何かがいつも起きていた。

それが、日常。

普通の日常の風景。

もうすぐ、それも、見ることができなくなる。

それが、日常ではなくなってしまう。

「そろそろ、出発の時間だ」

アラクは、そう告げる。

「その船は、一方通行。振り向いてはいけない。過去の過ちを繰り返してはいけないという、

先人からのメッセージがこめられている」

「はい」

湖族の少年は、力強く答えた。

「実は、数人しか乗れない小さな船もある。住人が望めば、数人な

らば、あの星に運ぶことは可能だろう。

しかし、旅立った者、残った者、これからは別々に生きていく……その決心が大切だ」

「はい！」

さらに、強く返事をする。

「何でも屋さん」

そこへ、しゅりりりが近づいてくる。

「君の帆船も、積んでおいたよ。使い慣れた船だ、向こうでも役に立つでしょ」

そして、少年に一冊の本を手渡した。

「調べられた範囲だけれど、あの星の危険なキノコとか、恐ろしい動物とか、

なんかそんなの書いたよ。暇だったから。役に立つかは分からないけれど、饑別にね」

あえて、危険なものしか書いていないところが、しゅりりらしい。

「それから、アラクにテースキラ。最後の大事な、がんばってね。見ているから」

そして、それを見届けた後は、きつと別れも告げずに、『どこか』へ行くのだろう。

それを、アラクもテースキラもよく知っている。

「これだから、自由気ままな神出鬼没は……」

移り住む人々と動物たちが、船に乗り込んだのを確認するとアラクとテースキラは、

ご神木の前で儀式を始める。
それは、天と地をつなげる儀式。

聖なる書に刻まれた文字を基に構築された、魔法の原理。
閉ざされた世界を開き、新たな地に接続する呪文。^{パースワード}
その全てを、解除する。

「瞳は、光。光の彼方は海。^{かなた} 海の彼方は、^{あなた} 生み。海は彼方に導き、
生みは路を開く。

恵みは海の波のように、生みは砂の粒のように、「
テースキラが、開放する言霊を発言する。」

「私の左手には地の恵み、地の基、地の球。私の右手には天の恵み、
天の礎、天の球。

私は、消滅と復元を繰り返す光の影。求めるモノは、海。呼び出す
ものは、生み」
同時にアラクも、呪文を唱える。

「うみの世界は、黎明に終わり、逢魔ヶ時に再び始まる……」
二つの言葉が、文字となり、重なり逢う。

小さな世界は、震えた。

白銀の神鳴の稲妻が、龍のごとく暗黒を翔け、落ちる。
黒い雲が二つに裂け、空間は捻じ曲がる。

外と中。

空と湖。

世界の境界が揺らぐ。

海の境、ウナサカの扉が開かれる。

閉ざされた世界から、水があふれ出し、道を作る。

現れたこの水流に乗って、

あの子たちが、

あの船が、

無事にあの青い星に着水するのを見届ける。

「これからは、我々の手から、開放され自由。再びここへ戻らぬよう、繰り返す歴史にならぬよう、

願うばかりだ」

「そうだね、」

船が、あの星についてしまえば、再びココを閉じなくてはならない。全ての水をあの星に流すには多すぎるし、まだこの場所に住む人は、いるのだ。

世界を閉じる呪文を発動させ、その全ての仕事は終える。

あとは、なるがままの空の船。

いずれ、何もしなくとも、この楽園は遠くに旅立つであろう。

それが何万年、何億年後になるのか分からない。

しかし、すでに星の重力圏から開放されつつある殻の箱なのだ。

仕事を終えて、何事もなかったかのように、自分の住処へ戻っていく。

これからもずっと、今までのように、何百年、何千年と生きていくのだ。

これからも、何一つ変わらぬ、孤独になっていく場所で、日々をずっと過ごしていく。

それを苦痛に思ふ感情、寂しさを感じる心は、もうすでにない。

そんなことよりも、この日のために、ずっと働いてきた身体は疲れ、休息を求めている。

癒すため、長い長い眠りを。

何も無い無機物な部屋の中、彼は寢床代わりの硬い椅子に座る。

この星は毎年数cmずつ離れていくだろう。

目で見て分からないが、今も、確実にあの星は、離れていつていく。

宇宙船としての役目を終えた星の船。

あの船はあと何億年か後には、地球の元を離れ、またどこかへ旅立ってしまふ。

その時、この船の中身は、どうなっているのだろうか……

再び、星の宇宙船に乗って、宇宙のうみを旅し、移住先を探さなくてはいけないほど、この星が死に絶えて……

あの船の中身は、再び逃れた生命であふれているのか……

この星のうみを渡る船が再び目覚める事がないよう、祈るばかりだ……

そして、その瞳を閉じた。

それは、久しぶりの休息であった。

魚の日記「ゆらゆら」

きょうも ふねは ゆらゆらゆれているよーん

はぐるまは くるくるまわって めがまわるよーん

そんな すてきな はぐるまは きょうも まわるよーん
うんめいってやつに みをかませて まわっているよーん

あちらこちら せかいを かけまくるよーん

いくら おふねのなかを さがしても
あの さんさんの かみさまたち みつからなかったよーん
どこか いっっちゃったよーん

かみさまは もう とおい ところに いるらしいよーん

せかいには もう かみさまは いないけれど
みんなが いるから きつと うまくやっついていけるよーん

> i 3 4 4 0 | 3 1 2 <

17・ウナサカ、海の果てへ。(後書き)

次回予告風

「巨大な大いなる水の源が、ことごとく張り裂け、天の水門が開いた」

- 創

世記7章11節 -

1つの湖と1つの島と1つの船。

それが、この世界の全て。

この世界は「箱の中」のようだった。

いや、本当に箱の中だった。

古代の遺産「ほしのうみの船」の着いた先。

そこに何があると言うのか？

広い世界を求めて、海を求めて……

少年は、今旅立つ!!

「みずうみのうみの船 - ぶかぶか編 - 『最終海』湖の海の舟』

「見てくれないと、いやだよーん!」

なんか、それっぽく書いてみた。

中身はイマイチでも、次回予告は面白そうだ、と思わせてナンボW

(映画と同じだネw・)

最終海・湖の海の舟

「変わった匂いのするところだね」
ここは、ほんのり潮の香りがした。

1つの湖と1つの島と1つの船。
それが、この世界の全て。
あの世界は「箱の中」のようだった。
いや、本当に箱の中だった。

今まで、どれくらい水の中をさまよっただろう。

古代の遺産「ほしのうみの船」の着いた先。
そこに何かがあると言っのか？

船の中は、守られているとはいえ、きしみ続ける船内の生活は、不安だらけであった。

7日ほど、経ったころだろうか、何かが去ったような気配を感じた。
外は静かになり、空にかかっていた雲も散っていた。

そう、風がやみ、雨が上がったのだ。

そして、巨大な船の甲板に出てみて、感動するのである。

久々の外の空気に、そして、広い空に、広い大地に。

太陽の沈みかけた空は、ほんやりと赤くにじみ始めている。

昼と夜の狭間に渦巻く風は、草原を流れ、海原を駆ける。

樹々のざわめきと、草木の包み込むような香りが、髪を撫でていく。

それは、光と闇が交替する時間の訪れ。

本来あるべき姿。

毎日のように繰り返されていた。

これからも、ずっと、繰り返すだろう。

閉ざされた箱の蓋は、開かれたのだ。

管理された小さな湖、一つの島は、もうない。

人ならざる者の管理する小さな楽園を離れ、

これからは、自分たちで生きていかななくてはならない。

手に入れたのだから、本物の空を、

手に入れたのだから、本物の闇を、

手に入れたのだから、本物の海を、

そして、

本物の海の果て、海の境界、『海界』ウチサカを。

広い自由に満ちたこの星で。

もう、湖賊では無い少年の冒険は、はじまったばかり。

空には、大きくて綺麗な『光』が浮かび、その旅路をいつまでも見守っている。

この広い空の下、宙に浮かぶあの星ヒカリが見守る中、海の上を旅した話をしよう。

そして……

小さな帆船に乗り、

世界に広がる、

母なる海、

ハルカナル　ウチサカに

旅立った……

魚の日記」「おおつなばら

日記は、白紙だ。

これから、書き加えられていくのだらう。

この広い空の下、

宙に浮かぶあの星しほのほしが見守る中、

海の上を旅した話で……

> i 3 4 5 2 | 3 1 2 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8695h/>

みずうみのうみの船-ぶかぶか-

2011年11月16日10時26分発行